ＰＳＯ　～The red of destiny～

神無月　あき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＰＳＯ　～Ｔｈｅ　ｒｅｄ　ｏｆ　ｄｅｓｔｉｎｙ～

【Ｎコード】
Ｎ３３７８Ｐ

【作者名】
神無月　あき

【あらすじ】
ＰＳＯ（ＰＨＡＮＴＡＳＹ　ＳＴＡＲ　ＯＮＬＩＮＥ）１０周年記念作品
・・・という体の過去に書きっぱなしだった２次小説の掲載です。
懐かしさとＰＳＰ２∞への期待を抱きながら楽しんでもらえればと思います。

パイオニア2でハンターズに所属するハンターの『アキ＝カミナ』はラグオル探索中に赤く光るセイバーを見つける。しかしそれは激しく損傷していた。

セイバーを修理する為、その修理費を稼ぐべくアキはギルドで仕事を探していた。そこで仕事内容が不明だが、高額報酬の依頼と出会う。

胡散臭さを感じながらも依頼元へ向かったアキはそこで耳を疑う仕事内容を聞いたのだった。

過去にとび、レッドリング＝リコに会うこと

ＰＳＯのストーリーに隠された一つの可能性を描く。

Chapter ?_a

「まじかよ！？」

俺は店のおやじから聞かされた値段に思わず声を上げてしまった。

ここはパイオニア2の商業区域。毎日が祭りのように賑やかなここでは、いろいろな商品が出回っている。日用品や食材などはもちろんのこと、ハンターズのための店も多数ある。俺はその中の武器の修理屋にいるのだ。

「嘘なんぞつかんよ。この武器はかなりの代物じゃ。そんな武器を修理するんじゃからこれくらいの値段は妥当、むしろ安いくらいじゃが？」

「う……」

俺は何も言えなくなった。それは俺が持ってきた武器はそんじょそこらにあるような武器とは違っていることを分かっているからだ。

俺がこの武器を手に入れたのは森を探索していた時のこと。逃げるラッピーを追いかけていたら、茂みの中で目の端に赤く光る物を見つけたんだ。それがこの武器。見たこともない武器だから名前は知らない。ただ、セイバー程の長さの刀身の武器で赤く輝いていたのが印象強かった。だから俺は勝手にこの武器を『赤セイバー』なんて名づけてるけどな。

そして、その赤セイバーで、ブーマと戦った時に俺はこの武器の凄さを知った。一太刀浴びせただけでブーマは地へと伏したのだ。ただ、その瞬間、赤セイバーは折れてしまった。たぶん古かったからだろう。そこで直しにいきつけの修理屋にいったんだが、指定された値段はなんと『５０万メセタ』！　普通のセイバーとかなら高くても５００メセタ程で修理出来るのだから耳を疑いたくなる。

「まぁ、お前さんの懐具合はよくしっとるからの～。すぐには払えんじゃろうて」

「じゃあもっと安くしてくれるのか！？」

「あほぅ。金はいつでもよいと言っとるんじゃ」

「なんだ…」

「そう落ち込むな。とにかくなんとか直してはおいとくでの」

「ああ、よろしく頼むよ…」

俺はそう言って足取り重く店を後にした。

「いらっしゃいませ～～って、アキじゃない。久しぶりねどうしたの？」

ギルドのカウンター嬢『ミューティ』の声が俺を出迎えた。

翌日俺は近くのギルドに顔を出した。

やはりハンターズをやっててまともに金が手に入るのはギルドにくる依頼をこなすぐらいしかない。結局その考えに至ったのだった。まぁそれでも一気に５０万も手に入るような依頼なんてないんだが……。

「最近どう？　調子の方は？」

カウンターで頬杖しながら訊ねるミューティ。彼女はブロンドの髪が特徴のニューマン。すらっとした目鼻立ちでとても美人だ。彼女とは何回もギルドで仕事を貰う度に会っているもんで、俺に対する接客態度はかけらも見えない。別にいいけどな。

「まぁまぁ。って言いたいけど、ちょっとコレが必要になってね」

俺は人指し指と親指で輪っかを作って説明した。

「ま、アキがここにくるなんて、そんな理由だと思ったけどね～」

「あれま。お見通しなのね」

「わかりやすいんだもん」

ニコっと笑顔を見せる彼女。そんなに単純かよ俺……。

「じゃあ話は早い。何か仕事ある？」

「まってね。リスト見てみる」

そういうと彼女は空中に浮かんでいるモニターに何度か触れた。いくつかモニターが現れると、彼女はこっちを向いて口を開いた。

「そうね。今なら『行方不明の私のミャーちゃんを探して！』とか『ビルの建設作業員の代理』とかあるけど？」

なんかどれも報酬の低そうな仕事だな……。

「ちなみに聞くけど、それ仕事終えたらいくらぐらい入ってくるの？」

「うんっとね、ミャーちゃんを探すのは１０メセタ。ビルの建設は一ヶ月働きつづけて５０００メセタね」

「うわっ！　ありえねぇ！　そんなんじゃラグオルに降りて落ちてる武器やなんかを売っ払う方がまだましだって」

予想以上の報酬の低さに驚いてしまった俺。そんな依頼誰がするんだよ……？

「他には無いのかよ？」

「他ね～…。後のもどれも似たような内容と報酬の仕事よ」

モニターの画面をスクロールさせながらそんなことを言うミューティ。

はは…所詮ギルドってことか…。

「何落ち込んでんのよ～？　一体いくら稼ごうとしてるの？」

うつむいている俺を覗き込むように訊いてくる彼女。

「……５０万メセタ」

「え？」

「５０万メセタだよ。５００でも、５０００でもなぁいの…」

俺は気の抜けた声で返事をする。

はぁ、ギルドも駄目となると本格的に手のうち用がなくなるな～。

「ちょ、ちょっと？５０万もなんに使うの？」

俺が片手で頭を抱えていると、困惑した声で彼女が訊ねてきた。

「うん？ちょっとな～」

「まさか～、なんかヤバイことに首突っ込んだんじゃないの～？」

「あほか。武器の修理に必要なんだよ」

冷ややかな目で俺を見るミューティに俺も呆れた目をしながら訴える。

「武器の修理ね～。ま、そういうことにしといてあげるわよ」

「なんだよそれ？」

こいつ信じてねぇな…そりゃあ俺だって信じられないけどな……。

「でも、５０万メセタだなんてそんな一気に手に入るお金じゃないし、地道に稼ぐしかないんじゃない？」

「やっぱそれっきゃないか～」

「そうそう。てことで、なんの依頼する？」

にっこり笑顔を浮かべてまたモニターに手をやる彼女。へいへい、働きますよ～～。

「とりあえず、収入がよくって、楽にこなせそうで、三食昼寝つきがいい」

「あんた仕事やるきゼロね……」

「うっさい。とにかく手ごろなやつを頼む」

「おっけ。え～～とね～……うん？　なにこれ？」

「どした？」

スクロールするモニターに目をやっていた彼女がある一点を見ながら硬直した。

「なんか、すごい依頼が入ってきたよ」

そう言いながらも彼女の視線はモニターに釘付けだった。

俺は今あるビルの一室の前に立っている。

ミューティに紹介してもらった依頼者がここにいるらしい。

一応ここまで来てみたが、俺はこの依頼をやろうかどうか未だに迷っている。それはこの依頼の報酬があまりにも桁外れだったからだ。

報酬『５０万メセタ』。そりゃあミューティも驚いたろう。依頼内容も『研究の手伝いをしてくれ』と、まぁなんとも曖昧。その研究内容に関しては一切載っていなかった。それでいてこの報酬。怪しさ爆発で普通なら手は出せそうにないが、今の俺はどうしてもお金はほしいし、ミューティの『やばかったらキャンセルしちゃいなよ』というアドバイスを受けて、一応仕事を受けることにしたのだ。

はぁ、でもやっぱ不安だよな～……。

と、俺がドアの前でおたおたしていると、

「何をしてるんだ、君は？」

「おわっ？！」

突然後ろから声をかけられて、俺は思わず情けない声をあげてしまった。

振り替えるとそこには、年の頃は俺と同じくらいの男がうざっ

たそうに立っていた。白衣を着てるから研究員だろうか？

「僕の研究室に何か用か？」

硬直する俺を見て、そういう彼。

僕の？　ってことはこいつが依頼者か？

「ここの研究室にオービック博士は？」

俺はなんとか気持ちを落ち着けて、依頼者の名前を尋ねた。

「ああ、それなら僕だが。あ、そうか君だね。僕の依頼を受けてくれたのは」

名前の合致に俺はこいつが依頼者だと確信した。しかし、俺くらいのやつが博士ね～。まぁ、見かけだけで年齢はわからないけど……。

「まぁ入りたまえ。中で話そう」

そういうとオービックは俺の背中に手をやりながら部屋へと入っていった。もちろん俺も入った。入らされたに近いかもしれないが……。

「早速依頼の内容を話すよ」

オービックは俺を椅子に座らせると、彼は立ちながらそう口を

開いた。

部屋の中は結構広い。ただ、さすが研究室というだけあってモニターやらケーブルやら書類やらがたくさんあって、それらが部屋を狭く感じさせている。一番気になるのは奥にある転送装置みたいなものだが……研究室には普通にあるもんなのか？

「君はオスト博士をしっているかい？」

オービックは俺に背を向けて話している。

オスト博士？聞いたことないな…。

「いや。知らないけど」

俺は正直に答えた。

大体、一般ハンターズが博士の名前なんて知ってるわけないだろうに。

「そうかい」

オービックは少しムスっとした顔を見せて、

「ま、所詮ハンターズってとこかな」

そう続けた。

わかってんなら訊くなっての！　いちいち感にさわるやつだな。

「とにかくだ。僕はそのオスト博士の助手をしててね。博士はすごい人だよ。探求心の塊のような人さ。それでいろいろな研究成果をあげている。僕が唯一尊敬する人だね」

おいおい。まさか俺の仕事ってのはこいつの話を聞くこと、だなんてことはないよな？まぁ、これで５０万手に入るなら別にいいけどさ……。

俺の心の声を知ってか知らずかオービックは更に続けた。

「それでね、博士はパイオニア１で先にラグオルに向かってしまったのだけど、その博士から面白い話を聞いていてね。その博士の話から、とあることを試してみたくなったのさ。それを手伝ってもらうことが君の仕事ってわけ」

やっぱり世の中はそんなに甘くはないってことね。だけど手伝うって何を手伝うんだ？

「それじゃあよくわからない。具体的に何をしたらいいんだ？」

俺の質問にオービックは間を置いて一言、

「遺跡に行ってもらう」

そう言った。

遺跡。ハンターズの集まる酒場で聞いたことがある。ラグオルの地下深くに人の手が入った空間があると。それがかなり前の物だったために『遺跡』と呼ばれているらしい。が、それはまだ機能している、とか、実は遺跡じゃなくて宇宙船だった、とかいろいろな

噂が飛び交っている。俺は実際行ったことは無いからその噂が正しいかどうかはわからないが……。

しかし、遺跡か……あそこは危険なエネミーがうじゃうじゃいるっていうし。あ、だから５０万とかいう報酬なわけか…。

……でも、遺跡に行ってなにをするんだ？　遺跡のエネミーのデータを取ってくる、とかか？

俺はそのことが気になって彼に訊ねてみた。

「遺跡に何をしにいくんだ？」

「何をするということはないよ。ただ、君にはある人と一緒に行ってもらう」

「ある人って？」

その質問に彼はこう続けた。

「レッドリング・リコさ」

「は？」

俺は彼の言葉に混乱させられた。

レッドリング・リコの名は知っている。ハンターズで彼女の名前を知らないやつはいないだろう。ただ、彼女はパイオニア１に乗っていて、今も尚行方不明。俺も森で彼女の残したメッセージを見た事がある。

そんな彼女と一緒に遺跡に行けとはどういうことだ？

困惑する俺を見てクスっと笑うオービック。

「まぁ君の頭では混乱するだろうね～」

うるせぇ～よ！

そんな事を心の中で思っていると、彼は更に口を開いた。

「もちろん今彼女は行方不明だ。所在は一切掴めていない。だから君には」

そういうとオービックはつかつかとあの転送装置のところまで歩き、

「過去へ跳んでもらう」

と、言い放った。

……。

過去？　何を言っているんだこいつは？

俺は更に混乱した。

そんな俺を見てオービックは更にニヤニヤする。

やっぱむかつくわ、こいつ…。

「僕はね以前時空間移動の研究をしていてね、時を越える実験にはすでに成功してるんだよ。だから君を過去に送る事が出来る」

彼は転送装置を二、三度叩きながら、

「この転送装置を使ってね」

そう言った。

はは、やっぱやばかったよミューティ。てか、やばすぎだろ…。

俺はこの依頼をキャンセルすることを決めた。

過去に行くだなんてとんでもないこと信じられるかっての。大体この博士怪しすぎる！　危なすぎる！

「それでね、」

「あ、悪いけど、俺やっぱりこの仕事キャンセルするわ」

俺はオービックの言葉を遮り、自分の意志を伝えた。

この依頼受けるならビルの建設を百ヶ月続けた方がいい。

「そういうことで」

俺はそういうと立ち上がろうとした。

が、

「ドタキャンは失礼だよ」

オービックがそう言うと、いきなり椅子からベルトの様な物が飛びだして、俺の体を椅子に固定した。

「なっ！？」

「大丈夫。タイムワープ中に命を落とす事はないから。君はあっちに着いてリコを見つけ、遺跡を目指す事に専念すればいいんだよ」

オービックは動けなくなった俺を椅子ごと転送装置に運んでいく。

「ちょ、コラ！　待て！」

「あ、向うに着いて死んでしまったら、それは僕の責任外のことだから。気をつけるんだよ」

そう言って俺を転送装置の中に押し込む。

「じゃ、よろしく頼むよ」

「よろしくじゃ…！！」

次の瞬間、俺の意識は遠のいていった。

「……～～い……じょうぶ～？　……もしも～～し？」

「……う…う〜〜ん…」

「あ、生きてるみたいね！　よかったぁ〜〜！」

誰…だ？

虚ろな意識の中、側で誰かが俺を呼んでいるのは微かにわかった。それが女の声である事も。

俺はうっすらと目を開けた。

「は〜ぁ〜〜い」

俺の目に入ってきたのはニコっと笑った女の顔だった。

「大丈夫？　立てそう？」

「…うん？　ああ、たぶん」

俺はそう言うと半身起き上がった。

体に痛みの走る個所はない。腕や足もちゃんと動くようだ。多少頭がくらつくがすぐに治まるだろう。

「どうやら大丈夫そうね」

「ああ。ところで、俺は一体？」

「あなた？　あなたはね、あたしがここを通りかかったら行き倒れ

てたのよ」

行き倒れって……そうか、オービックのやつに転送装置に入れられて飛ばされたのか……ちくしょう、あのやろう一発殴っとかないと気がすまねぇ！

見たところここはラグオルの森のようだ。とりあえずパイオニア2に戻らないと。

「すまねぇ、パイオニア2への転送装置はどっちにある？」

俺は転送装置の場所を介抱してくれた彼女に訊ねた。

「パイオニア2？？　何言ってるの？　やっぱ頭とか打ってるんじゃないの？」

うん？　どういう意味だ？

俺は彼女の言葉に困惑した。

「でも、そういえばそろそろね。パイオニア2がラグオルに着くのも」

俺は彼女から出たこの言葉にまさかの思いが過ぎった。

……ひょっとして……。

その時、近くの茂みが動いた。

エネミーか！？

俺は素早く立ち上がり戦闘体勢をとる。

茂みから出てきたのは黄色い体毛が特長のエネミーだった。

ラッピーか。こいつなら楽勝だな。

俺はセイバーに光を入れると、そいつに向かって大きく振りかぶった。

「待ってっ！！」

刹那、俺の背後で声があがった。セイバーは頭上で止まったままでいる。

「ここの森の動物たちはまだおとなしい子ばかりよ」

彼女はラッピーのもとまで来ると抱き上げ、頭をなでた。

俺は彼女のこの言動を見て確信した。

俺が知ってる森のラッピーだったら抱くどころか撫でることも容易には出来ない。それを彼女はいとも簡単にやってのけた。

俺は本当に過去のラグオルに飛ばされたらしい。

オービックのやつ……本物ってことかよ。

「あなたもやっぱり他のハンターみたいに凶暴化した動物たちを狙ってきた人なの？」

俺がそんな事を思っていると、彼女は悲しさと、ほのかな怒りの篭った視線を投げかけてきた。

「…あ、その……そういうわけじゃ……悪かったよ。謝る。ごめん…」

そういってセイバーのフォトンを消した。

「あたしじゃなくて、この子に謝る！」

彼女は抱き上げたラッピーを俺にズイっと差し出した。

「…ごめんな。恐い思いさせて」

「よし！」

俺の言葉にラッピーは「ぴっ」と小首をかしげただけだったが、彼女は最初の様な笑顔を見せてくれた。

「でもよかった。あなたが動物達を狙うハンターじゃなくて。最近の動物凶暴化事件は知ってるでしょ？　あれで凶暴化した動物達を狙うハンターがあちこちで動いてて。そういう中にどうせ凶暴化するんだからって、おとなしい動物まで狙うハンターもいるのよ。そんな人間がいるから動物達が急に凶暴化しちゃうのよ」

彼女は悲しそうな視線を遠くへやると、そう言った。

この時はまだ一部の森だけにエネミーとされる動物が現れているだけだったのか。

しかし、過去にきたならどうやって戻ればいいんだ？　まだパイオニア2が来る前の世界みたいだからオービックとも連絡が取れないし……あ、そうだ！　たしかあいつの知り合いにオスト博士とかいうのがいたな。その人はパイオニア1に乗ってたっていうし、オスト博士なら元の時間に戻る方法を知ってるかもしれないな。

俺はオスト博士を探すことにした。オービックの依頼なんかやってる場合じゃない。

「すまないが、オスト博士って人知ってるか？」

俺の突然の問いかけに彼女は少しキョトンとしている。

「オスト博士？　たしか、セントラルドームのラボのチーフをしてる人よね？」

「う～ん、詳しいことはわからんが、その博士に用があってね。博士のところまで行きたいんだけど、君わかる？」

「博士自体には面識ないけど、セントラルドームのラボになら行ったことあるから連れてってあげるわよ」

「マジで？　助かる～」

俺は思わぬところからの帰り道への近道を見つけ、気持ちが高ぶる。

こりゃ、早く帰れるかも。帰ったらみてろよオービック！　俺をこんな目に合わせやがって！

「じゃあよろしく頼むよ。あ、俺はアキ。アキ＝カミナだ」

自己紹介も兼ねて、改めて挨拶をした。

「あ、うん。こちらこそ。あたしはリコよ。リコ＝タイレル」

彼女はそう言って軽く会釈をした。

……て、ちょっと待て！？　リコ……リコ＝タイレルって、まさか！

彼女の名前に俺は驚いた。

リコ＝タイレルっていうのはレッドリング・リコの本名だ。それが彼女の名前っていうならこの目の前にいる女がレッドリング・リコだっていうのか……？

俺がそんな思惑を巡らせていた、そう、その時だった。

ばしゅーーーーんっ！！

突然、鼓膜と体を震わせる爆音が俺とリコに襲いかかった。

俺とリコはとっさに地面に伏せた。

揺れる大地、騒ぐ木々、森の生き物の悲鳴のような声が俺らの周りで渦巻いた。

実際には一瞬の出来事だったのだろう。しかし、３０秒、１分、５分、それ以上に俺は時を長く感じた。

しばらくして、体に感じる異変は治まって、俺はゆっくりと目を開いた。するとそこには……先となんら変わらない森の姿があった。

どうなってるんだ……？

「一体今のはなんだったの……？」

リコがゆっくりと起きあがって、周りを見渡しながらそう言った。

俺もリコと一緒に起きあがった。そして彼女と同じように辺りを見渡した。

確かにあの爆発が起こる前と見た目は何も変わっていない森。あんなに凄い音のした爆発なんだ、俺らの命が助かっただけでも奇跡的なのに、木の一つも折れたり、吹き飛んだりしていない。爆発前と変わらない光景がそこにはあった。

ただ、何か違うものを俺は感じていた。

その時、リコが何かを思い出したように駆けだした。

「リコ？　どうしたんだ！？」

「さっきの爆発、セントラルドームの方だったの！　みんなが心配！」

「待てよ！　軽はずみに動いたら危ないぞ！」

俺が上げた声が聞こえたかは分からないが、彼女は止まることなく森の中に消えていった。

どうしよう、リコがいないとどっちに進んでいいか分からない。追っかけるにしてももう姿は見えないし……。

しかし、なんだろう？　このさっきと違う感覚は？馴染みがあるような、さっきより今の方が逆に普通のようなこの感覚。これは一体……。

と、俺がもどかしくしていたその時、

「きゃぁぁぁぁーーーーっっ！！」

森の向こうから女の悲鳴が聞こえてきた。

この声はリコの声？　……そうかっ！！

俺はある事を思い出し、そして、リコが今危ない状況にあると考えた。

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅ・・・

Chapter ?－a（後書き）

２００６年　制作
２０１０年　加筆・修正

Chapter ?_b

俺は声のした方向に走る。

この馴染みある感覚は、俺がもといた時間の時と同じ森の感覚。殺気が漂う感覚だ。ということは、今のこの森の生物は、俺がいた時間の森の生物のように攻撃してくるはず。それを知らないリコがエネミー化した動物達に攻撃されたと考えてもおかしくない。

くねった道を駆け抜け、何度か茂みを越した時、倒れているリコが目に入ってきた。

「リコ！！」

俺がリコに近づき、安否を確認しようとしたその時、背後に気配を感じた。

俺はとっさにセイバーに光を入れて頭上で横にした。

刹那！　俺の背後にいた奴の振り下ろした腕がセイバーに阻まれはじかれた。

鋭い爪に大きな口、茶色の毛並みのエネミーだった。

ブーマか！

攻撃をはじかれ、よろめくブーマ。

よし！　今がチャンス！

立ち上がると同時に一気に間合いを詰めて、その勢いで奴の腹をめがけてセイバーで薙ぐ。

深く決まった一撃にブーマの腹部はえぐれて、ブーマは倒れ伏した。

「ふぅ」

危ないところだった。やっぱり森の生物達は凶暴になってる。そうだ！　リコは大丈夫だろうか？

俺がそう思って振り向いた、

その瞬間、突然地面が盛り上がり、土の中から新たなエネミーが現れた。

ブーマ？！　……違う！？　こいつはゴブーマだ！

毛並みの色が黄色だったことからそう判断した。が、その時すでにこいつは腕を振り上げ攻撃態勢にあった。

今からじゃ防御が間に合わない！　やられる！

ゴブーマの攻撃が当たる覚悟をした俺はギュっと目をつむった。

しかし、一向に攻撃があたることはなかった。

ゆっくり目を開けたその時、目の前にあったのは倒れているゴブ

ーマと立ち上がっているリコの姿だった。

「……リコ」

彼女は少し息を上げていた。

ゴブーマはリコに倒されたらしい。リコの手には武器が握られていた。

ん?!

俺は体に電気が走ったかと思った。リコが握っているそれは、俺が森で見つけたあの武器、赤セイバーに酷似していたのだ。

どういうことだ? どうしてリコがあの武器を……。もしかしたら似ている武器か、俺が見つけた赤セイバーとは別の赤セイバーって事も考えられるけど、あんな凄い武器がそう何本もある事の方が考えづらい。

俺はリコ本人に直接その赤セイバーについて訊くことにした。

いくら俺が考えたって、リコに訊けば一発なわけだし、確実な話が聞けるはずだ。

そう思い俺は口を開けた。

「リコ、その武器って…」

「ねぇ、」

しかし、その言葉はリコの言葉によってかき消されてしまった。

そして、俺は完全に口を閉じることになった。

リコの表情がとても暗く、悲しいものであることに気づいたからだ。

「一体どうなっちゃってるの……？　さっきまでは全然おとなしかったこの子達がいきなり攻撃してくるなんて……？」

下をうつむきながら言うリコ。

最悪だ…、剣のことばかりで頭がいっぱいになっててリコの事考えてなかった……。

「それは、」

「ねぇ！　わかんない！　教えて！　どうしてあたしはこの子を殺しちゃったの！？」

俺の言葉を遮ってリコは続けた。

混乱しているんだろう。俺は最初から森の生き物達は攻撃してくる敵だったからいいが、リコにとってはそんな面はなく、ただおとなしい動物で、ひょっとしたら親しくしていた動物もいたかもしれない。しかし、それに傷つけられ、それを殺めたんだ。いくら凄腕のハンター、レッドリング・リコでも混乱してもしかたないか……。

俺はどう言葉をかけていいか戸惑った。

リコはその場に崩れ座り、空からはいつのまにか雨が降り出していた。

シトシトと降り続ける雨。まるで今のリコの心の中を抽象しているかのようだ。

しばらくそのままで時が過ぎ、このままでは風邪でもひいてしまいそうだったので、移動を促そうとリコに声を掛けようとした、その時だった！

ズドーーーンッ！！

突然地面が大きく揺れた。

地震か！？

そう思った直後に俺は考えを改めた。目の前に俺の身長の倍はあるであろう巨大生物が立っていたからだ。

ヒルデベアだと？！

俺がそう思うや否やヒルデベアは空気を大きく吸い込むと、口から巨大な火の玉を吐き出した。その玉は確実にリコを狙ったものだった。リコはまだ放心状態のようでやつに気付いていない。

俺はとっさに彼女をかばうように飛び出した！

刹那！俺の身体を痛みと言う名の熱さが襲った！

「がはっっ！！」

「アキっ！？」

俺が彼女をかばうとリコは悲鳴に近い声を上げた。

「…俺は大丈夫だから」

そうは言っても正直痛い。だけど、今のリコには無理はさせられない。

俺はセイバーに光を走らせる。それと同時にヒルデベアの背後をとるコースを駆けていく。こいつに真っ向から挑んでったら命がいくつあってもたりゃしない。

横を通る俺に大振りのげんこつを放ってくるヒルデベア。だけど、この位置だったらあたりはしない。逆にその空振りの隙をついて俺は完璧に背後をとることが出来た。

よし！　一気にかたを付けてやる！！

俺はセイバーを振りかぶると、思い切りヒルデベアの背中目掛けて切り下した。更にそこから背中を突いて、そのまま切り上げた。

これだけやればさすがのヒルデベアも息絶えただろう。

そう思った矢先！

バゴッ！！

横から飛んできた巨大なげんこつが見事に俺にヒットした。

俺は空中に放り出されて、勢いよく地面に落ちた。

がっ！！

俺は声にならない声を漏らして、そのまま地面にうずくまる。

幸い落ちたところには草のクッションがあったから落ちたときのダメージは軽減できたが、直撃された個所の感覚がない。

あと一撃受けたらヤバイ！

そうは思っても体は動かない。そして、俺の目の前にヒルデベアが壁のように立ちはだかっていた。

くそ！　ここで俺がやられたら次ぎはリコがやられる！　それだけは阻止しないと！

俺は残り少ない力を振り絞って、なんとか立ち上がった。

ヒルデベアもかなりの痛手を負ってるんだ。あと一撃決めれればなんとかなる！

ふらつく足を保たせながら、キッとヒルデベアを睨む。

しかし、目の前の怪物はまたも大きく深呼吸をした。

また火球か！　この距離じゃあセイバーが届かない！　どうしたら！？

そう思っている間にもやつの口の中が炎の色に染まってきた。

ダメかっ！？

俺が諦めかけた、その時！

ぴっきーーーーんっっ！！

突然ヒルデベアが氷塊に閉じ込められて、その動きを止めた。

「…大丈夫？　アキ？　死んでない？」

氷塊の陰から顔が出てきた。

リコだった。

彼女は俺の傍らにくると、腕に付いている端末を何度か押した。すると今まであった俺のからだの痛みが嘘のように消えたのだ。レスタのテクニックを使ったんだろう。

「ごめんね。迷惑かけて」

リコは本当に申し訳なさそうにうつむきながら言った。

「いや、そんなことないって俺の方こそ助かった。ありがとな。それよりもう平気なのか？」

「ええ。正直まだちょっと整理しきれてないけど、さっきアキがあたしをかばってくれた時に思った。あたしには守らなきゃいけない

ものがあるって！」

そう言う彼女の目はとても力のある目だった。

さらに彼女は続ける。

「ここの生き物達が突然狂暴になったのにはきっとちゃんとした原因があるはずよ。それを突き止めて、早くみんなを元に戻してあげたい。それに、このままじゃセントラルドームのみんなも危険な目に遭ってるかもしれないしね」

そう言う彼女はまたニコッと笑顔を見せた。

きっとどんな時でも笑顔を絶やさなかったからリコはレッドリング・リコとしてどんなハンターよりも強いと噂されているのだろう。少なくとも俺はそう思う。

「そうだな」

俺とリコはセントラルドームに向かって駆け出した。

セントラルドームは白い建物だった。俺は元の世界でもセントラルドーム近辺には行ってなかったから今初めて目の当たりにしている。

あのあと俺等二人は何度かエネミーと遭遇してはその場を切り抜けてきたが、ここにきて一つの問題が発生した。

「ダメ……開かないわ」

リコが何度目かの同じ言葉を言いながら、その場にへたり込んだ。

セントラルドームに入ることが出来ないのだ。セキュリティが働いているのか、ありとあらゆるドアはロックが掛かり、窓も全てシャッターが下りていたのだ。

「どこか他に入れる所はないのか？」

「そんなこと言っても、全部入り口にはロックがかかちゃってるし……あ、そうだ！」

頭を抱えて悩んでいたリコが、突然何かを思い出したらしく、手をポンと叩くとこっちを向いた。

「セントラルドームの裏手に、緊急時用の入り口があるの。そこなら外からアクセス出来るからなんとか中に入れるかもしれないわ」

「よし！　そこに行こう」

俺等は最後の希望を胸にセントラルドームの裏手に回った。

が、

見事にその希望は打ち消されたのだった。

「何……これ？」

入り口があるであろうそこは、何者かに壊されたようにズタズタのボロボロにされたドアがあった。配線もやられているようで、所々から放電していてとても近寄れない。

「これじゃ入るのは無理だな」

「はぁ……ここも諦めた方がいいわね」

少し疲れた様子でリコは近くにあった大きな柱のような物の元に腰掛けた。

「中のみんな大丈夫かしら？　無事ならいいんだけど」

頬杖をつきながらセントラルドームを見上げる彼女。

「大丈夫だって。こうやってセキュリティも働いてるんだしさ」

俺は俺の世界でパイオニア１の人達が未だ行方知れずなのをリコには話さなかった。下手に心配をかけさせるわけにはいかないし、その情報も定かじゃあないしな。

「そうよね！」

彼女は嬉しそうな顔をした。でも、やっぱり不安だよな。

それに俺もセントラルドームに入ってオスト博士に会わなきゃいけないし。もとの時間に戻る今唯一の手がかりな訳だし、不安と言ったら不安に違いないが。

「アキも座ったら？歩いてばっかりで疲れたんじゃない？」

「あ？　うん。そうだな」

確かに疲れた。歩きっぱの戦いっぱで足が棒の様。

「隣いい？」

「どうぞ」

彼女はそう言うと、ポンポンと柱の元を叩いた。

と、その直後だった。

ゴォォォォォォーーーーーーーー！！

いきなりその柱が轟音を発して、柱に描かれていた模様に沿って下から上へと赤い光が走って言ったのだ。

「な、何？！　何が起きてるの？！」

「俺だってわかんねぇよ！」

混乱している俺等をよそにこの柱は尚もゴゥゴゥと重い音を上げている。

そんな中、この轟音で空気が大きく振動されたのだろう、近くにあった瓦礫が崩れ落ちた。

「危ない！」

俺はとっさにリコをかばって、落ちてくる瓦礫を回避した。

「大丈夫か？」

「う、うん。ありがとう」

「それにしてもなんだこの柱？　ただの柱じゃないのか？」

「ううん。普通の柱よ。パイオニア１の到着記念碑としてずっとここにあったから。ただ、なんだろう？　この模様。光が走って見やすくなったからかもしれないけど、文字に見える」

「文字？」

リコの言葉に疑問を投げかけた俺だったが、視界の端にあるものが目に入った。転送装置だった。たぶんさっきの瓦礫の中に埋もれていたんだろう。

「おい！　リコ！　あんなところに転送装置があるぞ！」

「あ、ほんとだ！　ひょっとしたらあれでドームの中に入れるかも。見てみましょ」

俺達は柱のことは後回しにして、転送装置を調べてみることにした。

「動きそうか？」

「待ってね……うん、生きてるわ。転送先は……え？　地下？」

「地下って、セントラルドームの地下か？」
「わからない。ただ地下って表示されてるだけで。でもたしかにセントラルドームには幾層の地下フロアはあるわ。ここに居てもラチがあかないし、行ってみましょう」
「そうだな。とにかくドームの中には入れるんだしな」
「じゃ、行くわよ」
そう言ってリコがスイッチを押すと、体が光に包まれて意識が遠のいた。

「なんだ？　ここは？」
意識が戻った俺の目に映ったものは、岩肌むき出しの広い空間だった。
こりゃあ地下フロアっていうより、地下空洞だな……。
「何？　ここ？」
リコも同じような反応を示す。どうやらリコもここの空間の存在は知らなかったみたいだな。
「ここは本当にセントラルドームの地下なのか？」
「う〜〜ん、あ、でもあそこ。あそこに見えるのってセントラルド

ームの一部じゃない？」

リコが指差した方を見ると確かに人工的な作りの物があった。

「あそこに入り口があるみたいだし、あそこから入ってみましょ」

「おう」

俺達がその人工物にあった入り口を目指した。ちょうどその瞬間だった！

ぎゃぉぉぉぉぉん！！

けたたましい叫び声が地下空洞に響いた。と、同時に大きな振動が俺達を襲った。

「……あれ、何？」

俺もリコも今俺達の目の前に現れたモノを凝視してしまっている。

ギョロっとした目、長いしっぽ、大きな羽、とかげのような体。これ等だけでも、十分目を見張るが、その全てが恐ろしいほどにデカかったのだ。

そういえば聞いたことがある。どこかの地下でドラゴンと戦ったことがある、と言っていたやつの話を。

まさか、こいつがそのドラゴン……！？

そんな事を思い巡らせていた矢先のことだった。目の前のドラゴンが顔を前に突き出すと、恐ろしく裂けた口を大きく開いた。その奥には渦巻く炎が今にも飛び出してこようとしている。

ま、まずいっ！！？

とっさに後ろへ跳んで、ドラゴンとの距離を離した。リコも危険を感じたらしく、同じように飛んでいた。

直後、ドラゴンは先ほど俺等がいた辺りへと渦巻く炎を吐き散らした。

「危なかったぁぁ」

「ああ、とんでもないことしやがるぜ」

「でも、あんな生物がいるなんて、あたし初めて知ったわ。一体どこに…」

「それを考えるのは、あいつをなんとかしてからにしよう。さもないと丸焼きにされそうだ」

「そうね。じゃああたしがやつの気をそらしてるから、アキは回り込んで攻撃をお願い。あいつ動きは鈍いみたいだから、懐に入り込めばいけると思うの」

「オッケ！　リコも気を付けろよ。いくら動きが鈍いからって、あの炎を食らったら一たまりもないからな」

「わかってる。それじゃいくわよ！」

リコの合図で俺等は二手に分かれた。

リコはドラゴンの前まで行くと、腕の端末を操作する。すると、彼女から青く輝く光がドラゴンに向かって伸びていった。たぶんパータを使ったのだろう。ドラゴンもその攻撃を受けて、彼女に向かって行く。

よし。とりあえず作戦は成功しているみたいだな。

そんな光景を目の端に捉えながら、俺はドラゴンの死角から懐に入り込もうと駆けていた。

懐まで後少し、そんなところで急にドラゴンが大きく羽を動かした。ドラゴンとの距離が近かった俺は、羽から生み出された突風に襲われ、一瞬目を閉じてしまった。すると、

え？　ドラゴンがいないっ！？

目を開けた時、ドラゴンの姿が消えていたのだ。

見失ったドラゴンを探す俺に向うからリコの声が飛んできた。

「アキ！　上よ！！」

上っ！？

リコの声に、そのまま天を仰ぐと、そこには羽を大きく広げた

ドラゴンが宙に浮いて、俺を見下ろしていた。しかも、奴の口にはさっきのように赤が灯っているじゃあないか。

やばいっ！！

そう思うや否や、ドラゴンはその口の赤を吐き出す。

地面に数メートルはあるだろうマグマのクレーターが出来上がった。

俺との距離は数センチ。俺は間一髪、炎を避けることが出来たのだ。

「あ、あっぶねぇ～……」

「アキ！　早くそこから逃げて！」

つぶやく俺に、リコが更に声をかける。

再度上を見れば、今度はドラゴンが上から降ってきたのだ。

俺を押し潰す気かっ！？　冗談じゃねぇ！

俺は地面を転がり、その場を離れる。刹那、俺の真横にドラゴンの巨大な足が着地した。その着地に周りの地面が大きく揺れた。

う、うわぁぁぁーーっ！！

その振動を間近で受けた俺は、高らかと宙に飛ばされてしまった。

しかし、その瞬間に目に入ってきた光景が俺に一つの考えを与えた。

ここからやつの背中めがけてセイバーを突き刺してやる！

俺は空中でなんとか姿勢を制御して、ドラゴンの背中に向かう。

ちょうど飛ばされた位置がドラゴンの真上でそのままやつの背中に俺は落ちていった。

「くらいやがれっ！！」

俺は落下の勢いも加えたセイバーの一撃をドラゴンの背中に突き刺してやった。

ぎゃおぉぉぉぉぉんっ！！

ドラゴンは叫びあがると、体を振るわせ、俺を振り落とした。

そしてそのまま、空中に逃げていく。

「大丈夫？　アキ？」

地面にかっこ悪くしりもちをついている俺に駆け寄って、リコが声をかけてくれた。

あんまり女の子に見られて気持ちいい姿じゃないな……。

「あ、ああ、だいじょぶ。とにかくあいつをなんとかしないと」

俺等が見上げる先にはまだドラゴンが、戦意に満ちた目つきで存在していた。

はぁ、やっぱりそう簡単には倒れてくれないか……。

だけど、このままじゃ攻撃のしようがない。奴は降りてくる素振りはもちろん、攻撃をしてくる様子もなく、ただ空中に浮かんでいるだけ。多分、さっきの攻撃がかなり効いてるんだろう。

「ねぇ、アキ、ゾンデ使える？」

このままにらめっこが続くのかと思ったその時、リコがドラゴンを見据えながらそう言った。

「ゾンデ？　一応使えるけど、なんで……そうか！」

「そういうこと。あれならあいつが下に降りてこなくても攻撃できるじゃない」

リコは腕を構えると、もう一方の手で端末を操作した。俺も続いて端末を操作してゾンデを使う準備をする。

「くらいなさいっ！」

「堕ちろ！」

二人同時にドラゴンに腕を突き出す。瞬間、奴の真上で稲光が

して、

ピシャッッァァ！！

俺等のゾンデが見事同時に奴の頭に決まった。

またも悲鳴を上げ、頭を振るドラゴン。ゾンデの一撃であんなに騒ぐってことは、顔が弱いんだろうか？　ま、俺も顔をやられるのは嫌いだけど。

「まだまだこれからよ！」

リコはそう言うと、続けてゾンデを撃つ体勢に入る。

じゃあ、俺ももう一発！

と、もう一度端末に手を伸ばした時、俺の端末を暗い影が覆った。

「なんだっ！？」

上を見上げると、ドラゴンがこっちに頭から突っ込んで来ていたのだ。

俺とリコはとっさにその場から離れた。直後、ドラゴンが数メートル先の地面に突っ込み、地中へと姿を消してしまった。

「倒したの……かな？」

静まり返った地下空洞にリコの声が響く。

「わかんないけど、あれじゃあさすがに生きてはいないだろう」

俺は奴が落ちた地面に視線を送って答えた。ドラゴンが落ちた地面には大きなクレーターが出来、地下を蠢くマグマで満たされていた。たぶん奴は最後の力を振り絞って、刺し違えるつもりだったんだろう。

「そうよね。あぁあ、研究材料にしたかったのになぁ」

「何言ってんだか……とにかくセントラルドームの中に入ろう。ここじゃあ熱くてたまらないしさ」

「あ、待ってよアキ」

俺はリコが追いつくのを待って、この場に不釣り合いな扉を開けた。

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅ・・・

Chapter ?_b（後書き）

２００６年　制作
２０１０年　加筆・修正

Chapter ?_a

「ここは…？　……セントラルドームに繋がっているんじゃないのか？」

俺は目の前に広がった光景にそう言葉を漏らした。

ドラゴンと戦った地下空洞から出て、しばらく人工的な通路が続いていた。ここはやっぱりセントラルドームの地下フロアだと確信して、通路を進んできたんだが、目の前に現れた扉を開けた時、軽い混乱にみまわれた。なぜなら、そこから先は人工的な通路ではなく、先の地下空洞のような岩肌で覆われた自然の空間だったからだ。

見ればリコも言葉がつまり、面を食らったような顔をしていた。

たしかにここまでは一本道だったのだ。つまり、ここ以外に行き着くところは無いはずなのだ。

この道はセントラルドームに繋がってはいないのだろうか？

そんな事が頭を過ぎった時、ふと、ある物が目に入った。

「おい、リコ。あれ見てみろよ」

「え？　あれって……あ、扉」

俺の指差した先には、今開けた扉と同じような造りの扉があった

のだ。

「そう。あそこにも人工的な扉があるってことは、ここにもパイオニア1の手が入ってるってことだろ。ってことは、きっとこの先がセントラルドームに続いてるってことだろ」

「そうなのかしら…」

俺の言葉にリコは顔を暗くする。

「まぁとにかく進もう。こんなところに居てもしょうがないしな」

早いとこオスト博士とかいう奴に会って、元の時間に帰してもらいたいしな～。

「あ、ちょ、ちょっと」

俺がそう言いながら歩みを進めたその時、向こうの扉の近くで何か動いているものが眼に留まった。

なんだ？　あれ？　ここからじゃあよく見えないけど、ブーマか？

二足で歩くシルエット。これで思い付くのはブーマかヒルデベア。だけど、体は小さい。多分ブーマあたりだと思うんだが……。

「……あれってエネミーかしら？」

「多分ね。まぁ、あれがエネミーだろうと無かろうと、攻撃してくるならヤルしかないけど」

俺はセイバーを構えて、ゆっくりとそいつらに向かっていった。

大分近づいてきて、俺はそいつらを改めて見て、驚愕した。

「な、なんだ…こいつら……？」

と、その時、

「な、何！？　こいつらっ！？」

俺の背後でリコが慌てた声を上げた。振り返るとそこには扉のところにいたエネミーと同じやつらがいつのまにか現れていたのだ。しかも3匹も。

こいつらは一体なんなんだ？

間近で見たそのエネミーはブーマとは違い、その体を毛並みが覆ってはいなかった。どちらかというと魚の体に近い感じがする。両の腕には鋭く光る刃物の様な物が付いていた。……というか、腕自体が刃物と化しているのか？

リコはそいつらと間合いを取ると、例のセイバーを構えた。

俺も後ろから現れたエネミーの方に向かって構えを取る。距離がこっちの方が近い。

リコがまず一匹に一撃を加えた。それに俺が続けてセイバーで腹の辺りを横薙ぎに払う。

それに他の二匹が俺らを挟み込むように迫ってくる。が、既に後

ろへワンステップしていたリコが腕の端末を操作して、

「くらいなさい！　ギゾンデ！！」

その腕を前に突き出す。

俺はそれに合わせて、横へワンステップ。直後、リコの手の平から幾本もの電撃が放たれた。

まともにその電撃を受けた二匹のエネミーは鳴き声らしきものを上げて、その場に伏した。

それを横目で確認した俺はもう目の前に迫ってきていた、最初に目をつけたエネミーにセイバーを構える。

今倒したやつとは色が違う……。ゴブーマみたいに、ワンランク上のやつかもしんないな。

俺はさらに集中すると、勢いをつけて赤い魚エネミーに三連続の切り払いをお見舞いした。が、緑の奴のようにあっさりと倒れてはくれなかった。

やっぱり強いエネミーか、なら！

俺も腕の端末を操作して、

「パータ！」

冷気を地走らせ、赤エネミーに当てる。すると、ようやっと力尽きたようで、その場に倒れ伏した。

「ふぅ、なんとかやれたな」

「そうね、でも、この生物は一体なんなのかしら」

未だ骸が残る異様な生き物を見下ろし、リコが言った。

俺も森以外は行ったことが無いから、森以外の場所に生息するエネミーは分からない。もっと腕のあるハンターだったら分かったかもしれないが……。そうだっ！

俺はある事を思いついて、腕の端末を操作した。

「ん？　何してるの？」

「ひょっとしたらデータベースにこいつらのデータがあるかもしれないだろ」

「そんな事あたしもやったわよ。だけど、データなんて無かっ……嘘…」

「ほら、有っただろ」

俺の端末から空中にホログラフでこいつらの細かいデータが映し出された。

「どうしてアキの端末なら見れるの？」

「あ、えっと、それは、俺のは最新だから」

そういえば、まだリコに俺が未来から来たこと話してなかったっけ。まぁこんなＳＦみたいな馬鹿な話、話しても信じちゃくれないだろうし、話すのも面倒だし、別に言わなくてもいっかな。

俺のなんとも陳腐な言い訳を少し疑うような目で見てたリコは、まぁいいわと流してそのデータに目を向けた。

う～ん、裏で危なげなことをやってるハンターにでも見られたかな。

「えっと、なになに？　緑の方が『エビルシャーク』で赤の方が『バルシャーク』か」

「みたいだな。そだ、またなんか見たこと無いエネミーが出てきたら分かるように、このデータ、リコの端末にコピーしてやるよ」

「いいの？」

「いいよ。別に怪しいデータじゃないし」

俺はそう言うとリコの端末にデータを写した。

変な風に思われたら嫌だかんなぁ～。

「じゃあ、このデータもメッセージカプセルに入れて、置いときましょ」

リコは自分のアイテムボックスからカプセルを取り出し、エネミーのデータを入れてその場に設置した。

リコは森からずっと少し歩いてはカプセルを置いていった。後から来るパイオニア2の人達に今のこの状況が少しでも分かるようにと。俺はもちろんそのメッセージカプセルを元の時間で見ているから、リコがそのカプセルを置くたびに不思議な気持ちを感じていた。

「じゃあ奥の方に進むぞ」

「ええ」

俺とリコは未来に言葉を残して、地下空洞の奥へと進んでいった。

「ほんとにこっちで合ってたのかしら？」

俺らは地下空洞をずっと進んでいって、地下水脈だろうか、溶岩が溢れ出す煮えたぎる暑さの空洞から、水の湧き出るひんやりとした涼しい空間に出た。でも、地上へ出たという感じはなく、未だに空は岩の壁で覆われている。

リコがそんな言葉を漏らしたのは、その地下水脈を更に奥へと進んだところだった。

「確かに結構歩いたけど、ほら、まだ人口の扉はあるし、はずれてはいないんじゃないかな」

俺は十数メートル先にある、これまでと同じような作りの扉をさして言った。

「でも、全然セントラルドームの施設が見当たらないし、人にも会わない。まぁ、こんな異生物がうろついてるところなんて、一般の人間は来れないと思うけど」

そんなことを話しながら、部屋の中に入り、今度こそ何かしらセントラルドームに近づいている確信がほしいと願っている時に、俺等の目の前に巨大な影が現れた。

これは、

「これは……地表にあった記念碑…？」

俺と同じ考えを口にしたリコ。

そう、俺とリコの前にそびえて立っていたのはセントラルドームの近くにあった柱と同じものがそこにはあったのだ。

「なんで……これがこんなところに……」

目の前の柱に呆然とさせられるリコ。

まぁ、確かに記念碑がこんな地下深くに建ってるのはおかしい。でも、裏を返せば、段々セントラルドームに近づいてるってことだよな。

「ほら、こっちに進んできて正解だったろ？　これがあるってことは、セントラルドームの近くってことだろ」

「う、うん。そうね。だけど、どうしてこれが……」

リコは俺の言葉を聞き流すような感じで、その柱に吸い寄せられていった。

別にいいけど、申し訳ないような態度くらい見せてもいいような気がするんだがなぁ。

そんなことを思っているうちにリコが柱の根元へ行き、何やら調べ始めた。

「なにしてんだ？」

「地表でも気になったんだけど、この柱の模様って、なんか文字に見えない？　ほら、ここの所とか」

リコが指差したそこの箇所を目をこらして見てみると、確かに。文章のリズムに似た感じの模様であることが分かった。

「で？　なんて書いてあるのか読めるのか？」

「ううん。駄目。もっとちゃんとしたツールがあれば別だけど、そんな準備してきてないし。今あるだけのツールだと、部分部分しか……」

そう言うと、肩を落として悔しがるリコ。そういえば、リコって研究者でもあったんだよな。こんな発見をしたらやっぱ気になるのかね。俺は別に興味は湧かないが。

しばらく、リコが柱を調べていて、そろそろ、出発を促そうとした時だった。

ゴォォォォォォォーーーーーーーー！！

またも柱が轟音を立てて唸りだしたのだ。

「ま、またかよ！？」

思わず驚きを口に出してしまったが、この柱の轟音は地表で特に何かしらの変化が出るものでもなかった事を思い出して、それ以上の何かはしなかった。

リコも一瞬驚いたようだったけど、すぐに調査に戻ったようだった。

が、

ドゴォォォン、ドゴォォォン……。

ん？

何やら、柱の轟音とは違う感じの音が耳に入ってきた。

気のせいか…？

そう始めのうちは思っていたが、その奇妙な音の違いはしだいに大きくなってきたのだ。

こ、これは…！？

もう空耳とは思えないその音は、地響きと共に俺等の後ろの壁から聞こえてきた。

リコもその音には気づいているようで、調査は止めて、俺と同じように後ろの壁に視線を送っている。赤セイバーを構えながら。

そして、もうしばらくした、その時！！

バゴドォォォォーーーンっっ！！

一点の穴も無いような岩壁を突き破って、巨大なドクロのような顔が現れた！！

「な、なんだこいつはっ！！？」

その巨大なドクロの顔はその下がまるでワームのようになっていて、体を地面に擦りながら、俺らとの距離を縮めてきた。

一瞬あまりの突然さと、こいつの化け物具合に気を取られてしまった俺は、ドクロワームの背中から伸びる長い突起物が俺に向かってくる事に気づくのが一瞬遅れてしまった。

まずっ！？　避けきれないっ！？

迫る突起物に対処出来ないでいた俺は、刹那、横からの急な衝撃を受けて、その場から大きく離れた。

地面に放り出されて、伏していると、耳元で声が聞こえた。

「大丈夫！？」

リコだった。

やつの攻撃に気づいたリコが俺に体当たりをして助けてくれたのだ。

「あ、ああ……すまない…」

俺は体を起こしながら礼を言った。

「お礼は後！　来るわよ！！」

そうリコが言った直後、ドクロワームはこちらに迫り、俺らを押しつぶそうとしてきた。

くっ！！

俺は真横に大きく跳んで、なんとかやつの体当たりをやりすごす。

よし！　チャンス！！

奴の横っ腹につけれた俺はセイバーを振りかぶると、思い切りの力を込めて、連撃を放った。

攻撃が当たるたびに、ドクロワームは悲鳴の様なものをあげている。どうやら効いているみたいだな。このまま押していけばなんとか……。

俺がそう思った時だった。

「アキ！　周り見てっ！」

リコの呼びかけに攻撃の手が止まった。

周り？　一体何が……！？　なっ！？

俺は目に入ってきたモノに言葉が詰まってしまった。

そこには何匹ものエネミー達がわらわらと俺等を囲んでいたからだ。

どういうことだ？　さっきまではエネミーの気配なんて感じなかったのに……。

一匹や、二匹だったらどこかに隠れていて、気配を感じ取れなかった事は考えられるが、これほど多いエネミーを感じ逃すなんて考えられない。どういうことなんだ……？

「アキ、とにかく、まずはこのエビルシャーク達をなんとかしよう！」

「そうだな。こんなに多いと、このドクロワームへの攻撃に集中出来ない」

そう言って、互いに頷くと、俺等は群がるエネミー達に向かって、攻撃をしかけた。リコがラパータやギパータで、エネミーを氷漬けにしたところを俺がセイバーでぶった切っていった。

しかし、一向にその数が減る気配が無い。むしろ増えている感さえある。しかも、あのドクロワームが突っ込んでは来ないものの、

時折、あの伸びる突起物で攻撃を仕掛けてくるからやり辛い。エビルシャークなんかの一撃よりもあいつの突起物を食らった方が確実に死ねそうな気がする。

それで目の前のエネミー達への攻撃に集中できない。

だからって、やっぱりドクロワームに攻撃をしかけても、この多勢じゃあアッという間に囲まれて、やっぱり死。結局はやつの突起物攻撃を気にしながら、エネミー達の数を減らしていくしかない。

そこんとこはリコも分かってるみたいで、攻撃目標はエネミーだ。さすがはレッドリング・リコって事か。俺なんかよりもバタバタエネミーを倒してるし。

バシュッ！！

何匹目かのエネミーを切り倒して、そろそろ荒くなってきた息をついている時だった。

「アキ！　危ないっ！　後ろっ！！」

少し離れたところで戦っているリコから、声が投げられた。

俺はその言葉を理解するのに、一瞬の間を要してしまった。

疲れてきて、後ろに気が向かなくなってた。奴が、俺に向かってあの突起物を走らせてきてるってことだ！

俺は、一か八か、振り返ることなく、その場で左へと側転をして、その場から離れる。その直後！

ザシュッ！！

先居た場所へと鋭いモノが地面をえぐる！

危なかったぁ～。あのままいたら、確実に串刺しだった。ふぅ、ほんとにリコは凄いな。自分だって激しい戦闘をしてるってのに、俺にまで目を配ってるんだから。

俺はチラッとだけ、リコを見て、ハンターである自分の未熟さみたいなものを感じた。それと同時にリコへ憧れのようなものも感じた自分がいた。

そんな一瞬和みの風が吹いた直後、リコの後ろから、また奴の突起物攻撃が迫っていた！

リコは丁度その瞬間、目の前のグラスアサシンの振り下ろしを受け止めている。このままじゃ、殺られる！！

そう頭が思うよりも先に、俺の足は駆け出していた！

間に合え、間に合えーーーっ！！

そう心で念じながら、セイバーで突起物を弾こうとそれを突き出した瞬間、

ガシュッ！！

奴の細長いそれは、俺の目の前をあざ笑うかのように、通り過ぎて行った。セイバーは紙一重のところで間に合わなかったのだ。

「リコっ！？」

振り向いたそこには、右肩から血を流すリコの姿があった。

なんとか急所を外すことは出来たのだろうが、その血の量から傷は浅いとは思えない。

「……大丈夫！　これくらいなら、平気…。レスタで、すぐに……」

そう言いながら、腕の端末に手を伸ばすリコのその手は、ふるふると震えていた。

それに容赦をかけることなく、迫ってくる、エネミー達。

俺の心は揺らいでいた。

俺が、俺がもう少ししっかりしていれば、リコは攻撃を受けずに済んだのに、俺のハンターとしての腕が、もっと、もっと高かったら！！

俺は冷静さを欠いていた。

目の前のエネミー達にギパータを放つ。パキパキと音を立てて、凍りつくそれら。俺はその事を目にも留めず、振り返って思い切り地面を蹴った。

あのドクロワームをぶっ飛ばす！！

「アキ？！　ちょ、ちょっと……？」

リコの言葉が耳に届くも、俺の足は止まらなかった。

もっと、俺が強いハンターだったらっ！！

自分の未熟さと、リコが大きなダメージを負ってしまった事で頭がいっぱいになっていた。

奴は迫る俺に例のごとく突起物で攻撃を仕掛けてくる。が、俺はそれを紙一重でかわして、更に距離を詰める。

間合いに入ったところで、俺はセイバーを思い切り振りかぶって、奴の顔目掛けて振り下ろす。が、手ごたえが無い。

続けてそのまま何度か奴の顔へと連撃を繰り返すも、やはり手ごたえが無い。

どうゆうことだ？　こいつには攻撃が効かないのか？　でも、さっきは手ごたえがあったんだ。いけるはずだ！

そう頭で考えて、俺は連撃を止めることなく続けた。

いくら反応が薄くっても、ダメージを積み重ねれば、倒れないはずがない！！

そう自分に言い聞かせて、攻撃に集中した。攻撃のみに。

直後だった。

俺の左肩が激しい痛みに襲われたのは。

見れば、俺の左肩にはグッサリと奴の突起物が突き刺さっていた。

そして、

ブシュッ！！

細長いそれは俺の肩を再度通り抜けて、戻っていった。

「ぐわぁぁぁっっっ！！」

瞬間俺は気を失いそうな痛みを感じて、悲痛の叫びをあげた。

穴が開いたそこからは赤い物がドクドクとたれ流れている。

くそっ！　だけど、これくらいじゃまだいけるっ！！

俺はレスタも掛けずに再度セイバーを振りかざした。

その時、俺の後ろで光と冷気が生まれた。多分、リコがラパータあたりでエネミーを凍りつかせたんだろう。

そう頭で思った直後に、リコの声が耳に飛び込んできた。

「一回ここは退こう！」

その言葉に振り返れば、こちらへと駆けて来るリコの姿があった。

俺は言葉の意味する所が理解出来なかった。

まだ、俺はやれる・・・。それに、俺の方が押しているんだ！

「大丈夫！！　まだやれる！　後少しでこいつをやれるし！！」
「いいからっ！！」
俺の言葉を抑えつけて、リコが怒鳴る。
「そんなに言うなら、リコだけ退けよ。俺はこいつを・・・」
パンッ！！
急に洞窟内で乾いた音が一瞬響いた。
俺は思わず頬を抑えると同時に、頭の中が真っ白になった。
リコは俺を強い視線で見据えている。
「そんなレスタも掛けないで戦い続けてるハンターに倒せる相手じゃないわよっ！！　冷静になりなさい！　ここは退くのっ！！」
リコの言葉に立ち尽くしになった俺は、腕を掴まれるとそのまま奥にあったドアの中へと連れて行かれた。
俺は、腕を引かれている間、ずっと歯を食いしばっていた。
改めて自分の未熟さが許せなかった。

To be continue....

Chapter ?－a（後書き）

２００６年　制作
２０１０年　加筆・修正

Chapter ?_b

しばらく走った所でリコは足を止めた。

地下水道だろうか？　それなりに激しい流れの川が目の前を右から左へと突っ切っていく。

俺とリコはそこで腰を降ろした。とりあえず、近くにエネミーの気配は無い。俺の肩の傷もすぐにレスタを掛けて治した。しかし、リコはあれから何も口をきいていない。俺も言葉が出ずにいた。

二人の間に漂う音は、この地下水道のザワザワとした音のみだった。

どのくらい経ったか暫くして、川の音ではない音が生まれた。

「さてと、これでよし。さって、アキもそろそろ傷いいんじゃない？」

「あ、ああ・・・」

メッセージカプセルを設置していたリコの突然の言葉に気の無い返事を返してしまう。が、さっきの俺の無茶な行動に何かしら言ってくると思っていた俺は、肩透かしを食った感があった。

「何も言わないのか…？」

そう言いながらも俺は地面に目を落としていた。とてもリコの顔

は見れなかった。

さすがに今は冷静さを取り戻して、さっきの自分があまりにもバカな行動を取っていたと思えた。だから、俺的にはさっきの事で責めてもらった方が気が楽になれそうだった。

「言うって、ああ～、さっきのハンターとしては、二流、いや三流のあのめちゃくちゃな攻撃の事かな？」

リコの少し茶化すような言葉が耳を刺す。顔は見えないが、その声から口の端が笑っているように思えた。

そうだ、言ってくれ！　そうでないと、なお辛い……。

俺は頭でそんな言葉をリコに投げかけながら、耳だけをリコに傾けた。

しかし、リコの言葉は俺の思っている事とは違うものだった。

「じゃあ、言わせて貰うわ。……ありがとう」

俺は自分の耳を疑った。

ありが…とう……？

俺はその言葉に思わず、顔をあげてリコへと視線を向けてしまった。

リコは続けた。

「確かにね、さっきのアキの攻撃とか行動はとても誉められたもんじゃないと思う。一流のハンターっていうのは常に自分とその周りの状況を掴んで動くものだしね。ただ、アキはあたしを守ろうとしたし、あたしが攻撃を受けたから、それで感情に任せた行動に出た。見ててすぐに分かったわ」

リコはそう言って、俺にニコッと笑顔を見せた。

俺はその言葉でまた目をそらして下を向いてしまった。

俺ってやっぱりそんなに単純なのか？

いつもミューティに言われてることをリコにも言われて、やっぱりは自分は単純な性格なのだろうかと、考えてしまう。

そんな俺の耳にリコの言葉が届く。

「嬉しかったわよ。あんなに真剣な顔で走ってきてくれて。だから、ありがとう」

そう言ったリコの顔は少し赤くなった気がした。

リコの言葉は俺が思っているようなものではなかったが、そのときの俺はもう辛くは無かった。それでいて、余計に自分はもっと強くなりたいと思った。

「さ、先を急ぎましょう。早くしないと、さっきの巨大なワームがここにくるわ」

「ほんとすまない。俺がもう少し冷静に動けたら、さっきでなんと

か出来たかもしれないのに」

「ううん、それにさっき撤退したのは、確かにアキが冷静さを失ってて危険だったってのもあったんだけど、それよりももっと重大な事態が起きたてたのよ……」

「え？」

そう言ったリコの表情は、にわかに暗くなっていた。

周りの空気まで重くなったその場は、またも水の流れる音のみが支配した。

それから、リコがゆっくりと口を開けた。

「見たのよ。さっき、あの巨大なワームの突起物に刺された小さなトカゲがゴボゴボと変化していって、目の前でコモドドラゴになったのを！！」

「え…？　どういう事だよ……」

俺がリコから信じ難い言葉を聴いた、その瞬間、

バゴドォォォォーーーンっっ！！

十数メートルほど離れた岩壁から、またしてもあのドクロワームがその姿を現したのだ！

突然の事に俺もリコも一瞬硬直してしまった。

その間にドクロワームはあの突起物をこちらへと走らせる。

まずいっ！？

が、距離があったのと、今は頭が冷静なのとで、なんとか俺はヒラっと後ろへ跳んでそれをかわす。リコも同じく先までいた場所から離れて、やつの一撃をかわしていた。

危なかった…！！　だけど、まだ奴への有効な攻撃方法が思いついていないのに、このまま戦っても勝てる術が無い……。

蠢くドクロワームと対峙しながら、頭の中でどう戦うかを考えていたその時だった。

グイっ！！

突然俺は後ろの方へと引き寄せられた。

思わず出した右足を軸に体を捻り曲げると、俺の腕をつかむリコが目に入った。

「とりあえず……」

そう言うリコの目を見て、俺はある言葉が頭を過ぎり口を開いた。

そして、その言葉はリコと同時に空気を振るわせた。

『逃げるっ！！』

見事な声のユニゾンを見せた俺等は、体の向きを反転、ドクロワームに背を向けて全力疾走を開始した！

「で、これからどうするんだ！？」

「それを逃げながら考えるのよっ！！」

リコの全く頼もしい言葉に更に足が速くなる。チラリと後ろを見れば、ドクロワームがその巨体からは想像がつかないほどのスピードで俺等へと向かってきていた。

くっ！？　このままじゃ逃げ切れないっ！！

軽く絶望が顔を覗かせた、が、その直後、俺はその絶望が希望へと変わるモノを見た。

船だ！

地下水道に浮かぶ、運搬用の船だろうか、人が乗るようには作られてはいないが、立派に水に浮かぶそれを目で捉えた。

「リコっ！　あれに乗ろうっ！」

「あれって、あのコンテナ運搬用の水上リフトの事？」

俺が指差す先の物を見て、リコは視線を定める。そして、その目に力が入った。

「それナイスアイデア！　この川結構流れが速いし、水の上に出ちゃったらあいつも手が出せないでしょ！　うん！　あれしかないっ

！」

二人で深く頷くと、川べりに留めてあるその水上リフトへと向かう。

たどり着いたそれは確かに水に浮かび、電力も生きていた。

が、川べりにある装置のような物にしっかりと接続され留まっていて、動かないようになっていた。装置とリフトを切り離すには、装置についているパネルを操作するしかない。だけど、操作の方法など分からない。セイバーで壊そうにも、力押しでは無理だと、その装置の頑丈そうな材質が伝えている。

確かにこれだけ流れのある川でビクともしてないんだから、こうゆう処置はしてあるか……。

俺が、この逃走計画を諦めようとした時、

「アキはリフトに乗ってて！　この装置が私の知ってるやつと同じシステムだったらなんとか出来るはずっ！！」

そう言うとリコはリフトが接続されている装置にしがみつく。そして即座にピコピコと画面を叩き出した。

そうか。ラボとかにも入ったことのあるリコだったらこういう装置の使い方も分かるか！

そう思う俺の視界に、目の前までに迫ってきたドクロワームが、あの突起物をうねうねとさせている光景が入ってきた。

「リコ！　急げっ！！」

「分かってる！　後少し……出来たっ！」

リコのその言葉と同時に、リフトがガクンと揺れると、水の流れに乗って進みだした。しかし、あまりにも流れが速いためにリコがリフトへ乗り移る前に大きく離岸してしまう。

「飛び乗れっ！！」

俺はリフトから体を乗り出して、腕を伸ばす！

川べりを助走して地を蹴るリコ。そして、彼女も腕をこちらへ伸ばす。

水上で近づく互いの手。しかし、後少しで届かない！　このままじゃリコが落ちる！

させるかぁぁぁぁぁ！！

更に腕を伸ばす！

「届けぇぇぇーーー！！」

心と体の叫びと共に伸ばした手に感触が生まれる。

届いたっ！

そう頭で感じる前に俺はリコの手を握り締め、思い切り引っ張っていた。

その勢いでバランスの事など考えていなかった俺は、リコと共にリフトの上に倒れこんでしまった。

「あ、危なかったぁぁぁ〜〜〜！！」

俺は無事にリコがリフトに乗れたことに安堵の息をつく。

見ればリコが飛び出したその川べりにはドクロワームが数本の突起物を突き刺していた。

改めてギリギリだった事を思い、助かった事に胸を撫で下ろす。

「……なんとか…、逃げ切れたわね……」

荒い息を立てながら、リコはリフトの上に大の字を描いた。

俺もそのまま腰は上げずに、方膝を立てるだけで、体をリフトに預けている。

「あの化け物は一体なんだったのかしら？」

少し息も落ち着いた所で、リコがぽつりと零した。

「データにあるかもしれないな」

俺はリコの言葉に腕のエネミー検索アプリケーションを開いた。

確かにあのドクロワームは他のエネミーとは比べ物にならない程デカかったし、攻撃も効きづらかった。これまで倒してきた地下洞

窟のエネミー共とは格段の違いを感じた。それに、リコの話からすると、奴がここのエネミー共を生み出していた事になる。
……いや、作り出していた、と言った方が合っているか。他の生物の構造を丸ごと変えてしまうあの化け物は一体……。

俺が色々思惑を巡らせていると、エネミー検索アプリケーションが検索の完了を告げていた。

俺はその情報を覗き込む。

「……デ・ロル・レ……？」

「出てきたの？」

リコも俺の端末を覗き込む。

「非常に凶暴的なワームタイプのエネミー。デ・ロル・レの主な攻撃手段はその触手にある。この触手は非常に硬く、岩を砕いたという報告あり。しかし、真に恐ろしいのはその硬さではなく、触手の先端から触手を刺したものへと注入する体液である。これにはその生物の構造を細胞レベルで再構成させる力があるのである。……って、もうデータにあるじゃない。もっと早くこのデータ見れば、もっと違う対応も出来たかもしれないのに」

リコは目に入ってきた情報を音読すると、ため息をつきながら肩を落とした。

「責めるような視線を俺に送るなよ……。しょうがないだろ、あんな化け物がいるだなんて思っても見なかったし、まさか、データなんかあるとは思ってなかったからな」

頬杖をつきながらジト目で俺を見るリコに俺は力いっぱい反論をする。

「まぁ、いいけどぉ」

「なんだよそれ」

「それよりもさぁ、このデータ本当に凄いわね。一体どこで手に入れたのやら……。もっと他に何か情報はないかしら？」

リコはそういうと、データの続きを眺め始める。

やっぱり、まだ俺が何かしらヤバイ事に関わってるって思われてるのかね……まぁどうこうなるわけじゃないからいいけどな。

俺はそう思いながら、どれくらい流されているのかと、川に目を配らせた。その時、遠くの水面で影が動いたような気がした。

ん？　なんか跳ねたか？

「ねぇ……このデータ……」

俺が川の果てに向かって目を細めた時、俺の背中でリコが呟く様な声を溢した。

「どうしたんだ？」

リコの方に振り返る俺に彼女はただ、データが映し出された端末を俺に向けた。

その端末の中央に映し出されている言葉に俺もリコと同じ状態に陥った。

「……水中においてもその活動力は地上のものと変わることはない……」

俺はその直後、さっき川の果てで目に入った水の跳ねを鮮明に思い出す。

そして、俺ら二人を巨大な陰が覆った。

「リコっ！！　来るぞっ！！」

俺はそう言葉を発すると真横へとステップをする。リコは反対側へと跳んでいた。直後、

どしゅんっ！！

俺らが先いた場所へと、あの突起物が突き刺さる。

振り向く俺の目に入ってきたのは、ドクロの顔が気味の悪い巨大ワームがそそり立つ姿だった。

「……やっぱり来やがったのか」

俺はこの光景に奥歯をギリっとやる。この状況下では逃げ道など無い。

「こうなったらやるしかない。アキ、覚悟決めて！」

リコの声が耳に届く。言われずともそのつもりだ。

「もう出来た」

「オッケ。じゃあ……行くよっ！！」

二人は同時にそれぞれの得物を構えたのだった。

どれくらい奴にセイバーの連撃を与えただろうか。

どれくらい奴の攻撃を避け、食らっただろうか。

俺もリコもそろそろ限界が近づいていた。つく息は荒く、武器を持つ腕も大分下へと下がってきている。

しかし、こんな状況の中でも俺は一つの確信が出来ていた。

それはこのデ・ロル・レとやり合えている、ということだ。かなう筈は無いと思って水上へと逃げたが、楽とはいえないまでも戦えてきている。奴を見ても体の所々から気色の悪い色をした体液が溢れ出し、痛々しい限りだ。攻撃は確実に効いている。場所がリフトの上ということもあって、奴がエネミーを作れず、攻撃を奴のみに集中出来るからというのもあるのだろう。

もう後はどちらの気力が先に尽きるかの勝負になってきていた。

リコが腕の端末を操作すると、その腕をデ・ロル・レに向けた。

「ラフォイエっ！！」

その言葉と同時に腕から一瞬光が放たれると、奴の体の中心で巨大な爆発が起きる。

叫び声が一瞬聞こえるが、その爆煙の中に動く影を捉えた。

その直後、煙の所々が紫色に染まりだす。

ちっ！　またあの光弾かっ！？

俺は後ろへとステップをして、奴との距離をとる。

この攻撃、奴の体から無数の光弾がリフト上いっぱいに放たれるものだ。当然逃げ場が無いものと考えられるが、この光弾、速度が遅いのが特徴なのだ。だから、光弾全体を把握して、光と光の間を縫っていけば、なんとか避けることが出来る。最初は突然の事に何度か光に当たってしまったが、今ではなんとか対処は出来るようになっている。

リフトの端まで距離を開けると、予想通り、無数の紫色の光弾が俺等に向かって放たれた。

俺はその瞬間、光を避けていくコースをすぐさま描き出す。

右へ、左へ、ダンスをするかのように、テンポよく光をかわして行く。

最後の光弾をかわし終え、再度構えをとる。が、先まで奴がいた場所には今や、川の小さな波しか立ってはいなかった。

また消えやがったかっ！？　どこへ行ったんだ！？

俺とリコは互いの背を合わせながら、三六〇度へと警戒をする。

デ・ロル・レは何回か水の中に潜って姿を消していた。しばらくすると水の中から現れて攻撃してくるのだが、どこから現れるかがまったく分からない。水の中ではさすがに攻撃出来ないし、こうやって警戒しているしかない。

奴の姿は見えない。しかし、背中から伝わってくるリコの息遣いが俺の心に安心感と平常心を与えてくれていた。一人だったらここまで冷静な自分ではいられなかっただろう。

だけど、リコの息はさっきよりも荒くなってきている。俺もそうだが、次の一撃で奴をやれないと敗色が一気に濃厚になるだろう。

俺は最後の力と気力をセイバーを握る両手に集中した。

直後だった。

大きな水の破裂する音が轟くと、リフトの進行方向とは逆の位置に巨大な存在が現れた。

『そこかっ！！』

俺等の声は同時に放たれた。そして、同じ方向へと体を動かす。

奴がセイバーの間合いに入ると同時に俺はそれを大きく振りかぶった。リコは赤セイバーを横に構えて突き進んでいた。

が、

「なにぃぃっっ！！？」

俺等は体に乗った勢いを足の摩擦で殺すことになった。

目の前のデ・ロル・レの口が紫色に光りだしたからだ。しかも、さっきまでの光とは比べ物にならないほどの強さで輝いてるじゃないか！

今までの光弾とは違うのか…？

「アキっ！　避けてっ！」

一瞬動きが止まってしまった俺の耳にリコの声が響く。その言葉に俺は体のみが反応して、その場から真横へと飛びのけた。

刹那！　俺とリコの真横を巨大な紫の光線が過ぎ去っていった。

……。

俺はまたしても動きが止まってしまった。光線が過ぎ去った跡、えぐれたリフトがそこにあったからだ。

冗談じゃないぞ！　こんなの食らったら一溜まりも無い！！

背中で汗がブワっと噴出すのが分かった。

と、同時に視界の端が紫色に輝きだした事も感じた。

まさかっ！？　またっ！？

振り返るそこには口を大きく広げ、光を凝縮した塊を今にも放とうとしているデ・ロル・レの姿があった。

そして、その光は放たれた！

しまったっ！！？

俺は咄嗟にその場からリフトを蹴って離れる。が、一歩間に合わない！！

「ぐわぁぁぁぁーーーーっっ！！！」

俺は周りの川の流れる音を打ち消す程の叫び声をあげた。

奴の光線に右足を焼かれてしまったのだ。

「アキっ！？　くっ！　この！　消えなさいっ！　ラフォイエっ！！」

続けて紫色の光線を撃とうとしているデ・ロル・レにリコが爆発のテクニック攻撃を仕掛けているのが、虚ろな視界に入った。

その攻撃でデ・ロル・レはまたも水の中に逃げたようだった。

それを見たリコはすぐさま俺の方に駆けてきた。

「アキ?！　大丈夫！?　今レスタ掛けるから！」

「すまない……ドジっちまった……」

「しゃべらないで！　回復が遅くなる！」

そういうとリコは端末を操作して、両手を俺の右足にそっと乗せる。

リコの両手が緑色の光を放ちだすと、感覚が薄れ始めた俺の右足に力が入るようになり、楽になり始めた。

なんとかなりそうだな……。

俺が希望はまだ捨てずにいられる、と考えた、その瞬間だった！

ざっっぱぁぁぁぁーーーーーんっっ！！！

俺等の背後で、水の破裂音が生まれた。

振り向く俺等の視界には予想通りのデ・ロル・レの姿があった。

動けない俺等を前にそのドクロの顔は笑っているようだった。

「そんな……後少しで回復するのに……」

「俺はもう大丈夫だから早く逃げろ！」

「バカっ！　何言ってるのっ！　まだ立つのがやっとくらいまでし

か回復してないのに！」

そう言うリコは俺の腕を引いてくれようとした。

が、その俺等にデ・ロル・レは容赦などしてはくれなかった。またもその大きく開かれた口には紫の光が集まりだしている。

くっ、駄目だ……このまま逃げたんじゃ、二人ともあの光線にやられちまう……！！

俺はリコだけでも逃がそうと考えた。二人とも死んでしまうよりはよっぽどましだ！

俺が覚悟を決めて、リコの腕を振り払おうとした時には、デ・ロル・レの口に溜められた光はかなりの大きさになっていた。

ん？　待てよ……もしかしたら……よし！　どうせ捨てた命だ、やってやるっ！！

俺はリコの腕から抜け出した。

「ちょっと！　何考えてるのっ！？　まさか、自分だけ死のうだなんて考えてるんじゃないでしょうね？！」

「さぁ、それはどうかな」

少し余裕を見せながらも、確かに立つのがやっとだった。

二本目の矢は無し、か……。まぁそんなものは最初っからないけどな。

俺はセイバーに光を込める。そして、狙いを定めると、体に残った全ての力を両足に送り込んだ。

決めてやろうじゃないのっ！！

俺がその時を待ち構えていると、デ・ロル・レが溜まった光を放つため、一瞬光を吸い込んだ。

「今だっっ！！　食らえぇぇぇーーーーっっ！！！！」

俺は腰と肩を連動させ、足に溜め込んだ力を右腕へと持っていく。

バシュンっ！！

セイバーの振り下ろされる音が響くのと同時に、その光は宙を駆けた。

そして、

ブシュっっ！！

肉の引き裂かれる音が耳に届く。

ぎゅぉぉぉぉーーーんっっ！！！

見事狙い通りにデ・ロル・レの口の中に飛び込んだ俺のセイバーは奴の内側から体を貫き、断末魔の叫び声をあげさせた。

そして、そのまま川の中へと沈んでいくデ・ロル・レ。そしてもう二度とその姿を現すことはなかった。

「……やったぁぁぁ〜〜〜」

俺は拳を天へ向かって突き上げた。

「……う、そ…、倒した…の……？」

静けさを取り戻した川に目を落としながら、唖然とした調子でリコがそう溢す。

俺はそのリコに、グッと親指を突き立てて見せる。

そして、そのまま最初のようにリフトの上に大の字を描いた。

「え？　ちょ、ちょっとっ？！　アキっ？！」

リコが倒れた俺に驚いて、近寄ってくる所まで記憶して俺の意識は飛んでいった。

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅ・・・

Chapter ?_b（後書き）

２００６年　制作
２０１０年　加筆・修正

Chapter ?—a

ここは、どこだ……？

不思議な空間。俺はその空間に沈んでいるような、浮かんでいるような、そんな感覚が俺を包んでいた。

ゆっくりと首を回してみても、見えるのは赤黒い空間が広がる光景だけ。上も下も同じだった。

俺は、死んでしまったんだろうか……？

だけど体の所々が痛い。死んでしまったのに体が痛いなんてのはおかしいと思う。

それに、なんだろう、この耳鳴り……。

さっきから俺の耳にドック、ドック……と、何かの鼓動のような音が届いている。それに意識を向けると、この空間全体から響いてくるようだった。

なんだこれ……気持ち悪い……。

耳鳴りに意識を向けたからだろうか、その音がやけに大きく聞こえるようになった気がする。

やめろっ！！　それ以上俺に入ってくるなっ！！

更に大きくなる鼓動に俺は気が変になりそうだった。

そして、その鼓動は俺を包み込んだ。

その時、にわかにその鼓動が鳴り止んだ。

が、その直後、俺の耳元で囁くような声で言葉が生まれた。

モッ　ト　　フ　カク　へ　　コ　イ

その言葉と同時に俺は何かを見た気がした。が、それを記憶する前に俺の意識は遠のいていった。

「……う…う〜〜ん…」

俺はうっすらと目を開けた。

ぼやけながらも俺の目に映る光景は、今までいたごつごつとした岩肌の空間ではなく、懐かしい感さえある、人口の壁で囲われた空間だった。

そこへ急に、ヌッと影が俺の顔に落ちる。

「は〜ぁ〜〜い」

俺の目に入ってきたのは眼鏡を掛けた女の顔だった。

「リコ……？」

「そうよ。寝ぼけてるの？　息はしてるのに、全然目を覚まさないから心配してたわよ」

俺が目を覚ましたことを確認したからの様に、リコは俺の顔を一瞥すると武器のチェックを始めだした。

ふぬ……心配してくれていたなら、もちっと愛ある反応をしてくれてもいいんじゃないかなぁ、とか思うんだが……。

俺は半身起き上がって、そんな事を思いながら肩や腰を動かしてみる。

うん、痛みは無しか。リコのレスタのおかげだろうな。

「……アキ、体の方はもう大丈夫？」

赤セイバーに目を落としながら放たれたリコの声が、俺の顔をそちらへと向けさせる。

「ああ、レスタかけてくれたんだろ？　全然痛みを感じないよ」

「そっか、よかった」

俺の言葉にリコは軽くはにかんだ笑顔を付けて返事をしてくれた。俺はそれを見て心臓が一瞬吸い上げられた感じを受けた。

よく見れば、俺の体の下にはリコの物であろう、一枚の毛布が敷かれていた。俺は心の中でさっき思った事を撤回した。

「そういえば、やけにうなされてたけど、変な夢でも見てたの？」

夢……そういえば、何かこう不思議なような怖いような夢を見ていたような……。

思い出そうとすればする程、空気が抜けていく風船のように、形にしようとすればする程、崩れ落ちる砂山のように、その夢の記憶は彼方へと飛んでいってしまう。

そんな中ただ一つ、心に残った事があった。

気持ち悪い……。

それだけが強く心に烙印を捺したかのように跡を残していた。

「う～ん……よく思いだせないんだけど、いい夢じゃなかった、と思う」

「みたいね」

「なんか気持ち悪い」

「夢を思い出せないと確かに気持ちはいいもんじゃないわね」

「いや、そういうんじゃなくて、こう、なんていうんだろう、自分の体が自分の体じゃないような……」

「？？」

俺の言葉にリコは首を傾げる。まぁ、確かに分からないよな。言ってる俺でもよく分からないし……。

「でも、やっぱりそういうことは早いとこ忘れちゃうのがいいんじゃない？　いつまでも考えてると、ずっとそんな調子が続くもんよ」

「うむぅ……」

リコはそういうが、どうもやっぱりスッキリしない。考えないようにしようと思っても、全然頭から離れないしなぁ。

俺がいつまでも浮かない顔をしてるもんだから、リコが痺れをきらしたのか腰を上げた。

「さ、そろそろいいんじゃない？　体動かした方がいいと思うし、先に進もう」

そう言って俺に手を差し伸べる。

そういえば、ここは一体どこなんだ？

促されるままに腰を上げながら自分が今どこにいるのかが疑問に思えた。立ち上がってみても、やっぱり目に入ってくるのは整えられた壁に明るい空間。所々にモニターが浮いてたりする。

どう見ても俺が今までいたとことは間逆の場所だよな。

そんな俺を見たのかリコが口を開いた。

「ここがどこだか分かんない、って顔してるわね」
「よく分かってらっしゃる」
「実はあたしもよく分からないのよね」
「なんだそりゃ」
「倒れたアキを介抱してたら、リフトがこの施設の中に入っていったの。だからあたしにもここが何なのか分からないってわけ」
リコはあはは、と頭を掻いたりしてみせた。
「ただ、一つ確かなのは、」
しかし、急にリコの顔が真剣な物になった。
俺はそのあまりの急な変わり様に息を呑んだ。
「ここの施設にはあたしらの、パイオニア1の技術が使われているって事」
リコはそのままの表情でそう言葉を続けた。
ん？　てことは、セントラルドームに着いたって事なのか？　でも、それならリコが分からないわけないだろうし……それにそれならもっと明るい顔をしてもいいはず……。どうしてこんな不安な感じの顔をしてるんだろう。

しかし、その答えは俺の心を読み取ったかのように、リコの次の言葉ですぐに分かることになった。

「だけどね、あたしはこんな施設があるだなんて知らなかった。正直ショックよ、常に新しい情報は集めてたし、それに気を使わなくたってもこんな施設が作られるなんて話聞かないはずがないのに全然寝耳に水だった。つまりここはセントラルドームなんかじゃない。しかもＧＰＳを使ってみたらここはかなりの地下……。これは完全にこの施設が極秘裏に作られていたって事になるのよ……」

俺はその話に喉を鳴らした。正直、ここの施設がなんであろうと俺にはどうでもいいことだ。ハンターズやってる俺には政府もラボも別世界、何をやろうと知った事はない。ただ、リコのその重い表情が俺の目を彼女から離させてはくれなかった。

「まぁ、だけど」

次の言葉を口にしたリコの顔がにわかにさっきの明るい顔に戻る。

「あたしもハンターズだし、政府の事全て分かってるわけじゃないし、今色々と考えてもしょうがないわけなのよ。情報を手に入れようにもセントラルドームにリンクが繋がらないし……だから今はやっぱりセントラルドームのみんなを見つけるのが先決！　たぶんこの施設のどこかにセントラルドームに繋がる転送装置があるはずだから、それを見つけましょう」

そう言ってまたあの落ち着く顔を見せてくれた。こんな状況なのに笑顔でいられる、いや、作れるんだからやっぱりリコは強いな。

俺もそんなリコにつられて笑顔を作っていた。

「あ、そうだ。アキ、あなたこれ使いなさいよ」

突然俺に突き出されたリコの右手には、あの赤セイバーが握られていた。

当然俺はその行動に面を食らった顔になる。

「え？　いいのかよ？　これ俺に渡したらリコはどうやって戦うんだ？」

「大丈夫よ、まだあたしにはオリジナルの武器が色々とあるんだから」

そういうと、リコはアイテムボックスから何かを取り出した。

ん？　ソード？

その全貌を覗かせたそれは、俺の身長の倍はあるような刀身の剣だった。しかし、そのソードは普通のソードとは明らかに違っていた。セイバー同様全体が赤に染まっていたのだ。

「この子はセイバーと違って、重くて扱い辛いけど、囲まれた時まとめて吹っ飛ばせるしね。十分やれると思うわ」

リコはそう言いながら赤いソードを構えてみせた。かなり決まっている。

「だからアキはそのセイバー使って。さっきのデ・ロル・レ倒すためにセイバー失くしちゃったでしょ？　普通のセイバーとは違うか

ら最初は扱い辛いだろうけど、すぐに慣れてくると思う」

俺はリコから渡された赤セイバーの柄の部分をギュっと握った。

この重み、握り具合、俺の腕へと伝わる感覚全てが、あの森で拾った赤セイバーと酷似していた。

あの、森の時に訊くタイミングを逃してから、この赤セイバーについて訊ねるタイミングを見つけられなかった。だから、未だにこの赤セイバーについての俺の中での謎は解けていない。

そして、リコの赤セイバーを握ってみて、その謎は更に深まって行った。なぜなら、どんな武器でも少しの違いはある。それは使う者の癖や使っている長さで違いが出てくるものだ。だから新品ならまだしも、森で拾ったあのボロだった赤セイバーと、リコがずっと使っていたこのセイバーがこんなにまでも似ているのは恐いものさえ感じる。

リコはこの武器をどこで手に入れたんだろう？

「なぁリコ、この剣って、どこで手に入れたんだ？」

「この剣って、赤セイバーの事？」

「あ、やっぱりこれって赤セイバーっていうのか」

「何そのやっぱりって、どうせあたしはセンスないわよ」

リコが頬を膨らませてそっぽを向く。

ん？　待てよ、さっきリコはこれらの武器がオリジナルだって……ていうことはこの剣って……。

「リコ、ひょっとしてこの赤セイバーってリコが作ったものなのか？」

「ん？　そうよ、さっきも言ったじゃないこの剣はあたしのオリジナル。どう？　いい剣でしょ」

ついさっきの膨れっ面はどこへやら、リコがもっと訊いてと言わんばかりに身を乗り出す。

「これはね、パイオニア1のセントラルライブラリーにあった、なんとかカノンとかいう武器をモチーフにして作ったのよ。なんか伝説の剣らしくってね、それにあやかってこの形にしたんだけど、威力の方も自分で納得出来るモノにまでなったわ」

リコが続けて口を動かす。が、俺はその言葉が耳には入れども頭の中に留まる事は無かった。

俺はその間、ずっと考えていた。

どういうことなんだ？　この赤セイバーがリコのオリジナル？
じゃあ俺が見つけたあの赤セイバーは一体なんなんだ？

この剣がこの世にもう一本存在するっていう事はもう考えにくい。となると、あの森にあった赤セイバーはリコの赤セイバーっていうことになる。今俺がいるのは過去の時間だ。これから先の時間から俺がいた時間までの間に何かあって、赤セイバーがあそこに置き去りにされたって事が一番考えられる事だけど、そうなると、リコの

身に何かあるのか？

……まさか、俺の時間でリコが行方不明になっている事と何か関係があるんじゃあ……。

「……キ……ねぇ…アキ……アキ！」

「え？？」

気づくとリコが俺の耳元で声を押し殺して、しかし強く声をかけていた。

「あ、すまん、別に話を聞いてなかったわけじゃ、」

「しっ！　静かに。何かいる」

俺の開く口に手を当て、もう片方の手で自分の口元で人差し指を立てながら俺の言葉を制した。その目は向こうの壁の陰を見ている。

俺も聞き耳を立てる。確かに何か物音が耳に届く。

その音の元が何なのかは分からない。セントラルドームの人達かもしれないし、洞窟にいたエネミーがここにも巣くっているのかもしれない。

俺とリコはゆっくりと壁に背を当てながら音の方へと近づいていく。そして、慎重に壁から顔を出した。そこには、

「なぁ～んだ」

リコは、はぁ、とため息を吐いて体もヌッと壁から飛び出させた。

「出て来ても大丈夫よ、アキ」

そう言われて、俺も壁から体を出した。

そこには幾体かの作業用アンドロイドがいたのである。

同じ人型機械だとキャストの連中も大枠で同じ括りにされそうだが、こいつらはキャストのような感情は持ち合わせていない。プログラムされた工程を延々と繰り返していく単なる機械。

辺りにはこいつら以外には誰もおらず、無機質の世界が広がるだけだった。

「う～ん、人は居ないみたいね」

「だな」

「エビルシャークとかもいないみたいだから、荒らされてはいないだろうけど、機械だけが動いてる空間ていうのもなんだか不気味よね」

「まぁ、こいつらには感情プログラムは組み込まれていないからな。それが余計に不気味な感じをかもし出しているんだろう」

俺はそう言いながら周りで働くアンドロイドを一瞥した。

ん??

その時、ある異変に気づいた。

アンドロイド達がその作業をする手を止めているのだ。

その異変にはリコも気づいたようだった。俺のように辺りを見回していた。

「これって……一体…？」

リコがそう漏らした瞬間だった。

ガシャンッ！！

合わせたかのように辺りに金属の擦れ合う音が響いた。そしてそれはアンドロイド達の腕から現れた銃口が俺らを捕らえた音だったと瞬時に脳が理解した。

刹那、体がそれに反応する。

横に置いてあったコンテナの陰へと大きく飛び込んだ。

直後、無数の光の筋が、俺が先まで居た場所を隙間の無いほどに走り抜けていった。

ビームだっていうのかよっ！？

どうして、工業用のアンドロイドがビームなんていう物を撃てるかが疑問になったが、今はそんな事を考えていられる余裕は無かっ

た。続けて二撃目のビーム群が放たれたのだ。このままここにいたら、いつこのコンテナが貫かれるか分からない。

俺と同じように近くにあった柱の影に身を隠したリコがこちらへ声をかけてきた。

「どういうことなの！？　工業用のアンドロイドが襲ってくるなんて…？」

「わからん、だけど、今はそれどころじゃないだろ？」

「そうね……そうだ、このソードなら突破口が作れるかも」

リコは自分の赤いソードをギュッと握ると、手元を見つめて、そして俺に視線を当てた。

確かにリコのソードなら幾体いるか分からないアンドロイド共を一気に吹っ飛ばして突破口を作れるかもしれない。ただ、俺もソードを扱った事があるがセイバーに比べて、非常に重く、一振り一振りが遅い。その振りの遅さが問題ってわけだ。

俺は心の中でリコの意を理解すると、彼女に向けて大きな頷きで返事をした。

今度は俺がリコからもらった赤セイバーの柄の部分に目を落として、一つ二つ深い息をした。

……よしっ！

ビーム群とビーム群との間を見て、コンテナの陰から飛び出す！

俺は一気にアンドロイド群との距離を縮めて、その勢いに乗った赤セイバーで一番前にいた一体のアンドロイドを切り上げた。そして、そのまま重力も使った振り下ろしで二撃目をあたえる。すると、そいつは吹っ飛び、床に伏せると、バチバチと体から火花を散らした。

意外ともろいか。だけど！

後ろにチラリと目を配らせると、すでに退路は断たれていた。

く、やっぱりこの数でセイバーじゃあすぐに囲まれちまう。

互いに当たるのを防ぐためか、ビームは撃ってこないものの、この数に袋にされたら確実に死ねる。

そろそろか。

俺はその場で少し体を屈めた。

「アキっ！　ふせて！！」

待ってました！

俺は直後に後ろから聞こえてきたリコの声に、即座に床に伏せこむ。

瞬間！

バガシャンっっ！！！

にわかに視界が開けた。

リコが俺の頭の上で思い切りソードを横薙ぎしたのだ。

顔を上げると辺りにショートの火花や、肢体をバラバラにされたアンドロイド共が床に幾体も転がっていた。

さすがはソードってところか。

ソードの威力に感心してるところにリコが声をかける。

「アキ！　このままいくわよ！」

そう言いながら次の一撃を決めるため、リコは再度ソードを走りながら構えていた。

「おうっ！」

俺はリコの後ろに付いて、横から来るアンドロイドを払いのけながらその場を突破していった。

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅ・・・

Chapter ?－a（後書き）

２００６年　制作
２０１０年　加筆・修正

Chapter ?—b

「くそ！　これで何体目だ！？」

とりあえず、さっきの区画は脱出することが出来た。しかし、進めど進めど、あのアンドロイドが大量に現れ俺らの行く手を阻んでいた。その上、行けども行けども人の姿は目に入る事はなかったのだ。

こんな暴走したアンドロイド共が蠢く空間には確かに人なんて居られないだろうが、俺らは希望を捨てなかった。……いや、捨てられなかった。

「わからない！　けど、見て！」

そういうリコが顎で指し示した方向を見るとロックの解除されたドアが目に入った。

ここまで、群がるアンドロイド共を跳ね除けていくだけで精一杯だった。とてもじゃないが、全部倒していったらキリが無い。次への部屋へと続くドアを見つけてはそこへ飛び込んでいった。

俺は目の前のギルチックに赤セイバーの一閃を決めると、続けて左手にセットしていたギゾンデをお見舞いした。

よし！　これであのドアまでの道が開けた。

リコに目配せすると、彼女は軽く頷いて、目の前にいたギルチッ

ク共に横薙ぎを食らわせてこちらへつま先を向けた。

「次の部屋こそ人がいることを願うわ」

「ああ」

後ろのギルチック共とは多少距離がある。このまま一気にドアのところまでいけるか。

グングン近くなる鉄の扉にあと少しで辿り着く。その瞬間だった。

シュワワァァァン！！

突如目の前に転送の光が収束しだした。

「くそ！　まだ来るか」

俺とリコは足を床に摩擦させる。

こいつが転送完了する前にあのドアに辿り着くのは難しいだろう。

体に乗った勢いが消えたところでちょうど転送が完了して、光の中から転送されてきた奴がその姿を現した。

「こ、こいつはっ……！？」

「一体……？」

俺ら二人は思わず声を漏らした。

目の前に現れたこのアンドロイドは今までの奴とは一線を画していた。そう、まるでこれは、

「戦車……？」

リコも俺と同じ事を感じたようだった。俺より先にその言葉を口にする。

俺らの体の何倍かはありそうな巨大な体躯。そしてそれをまとう鋼の体。他のアンドロイドの様に手足があるヒューマンタイプではないが、背中に重火器のような物が見える。

まさに動く戦車だな……ん？

あまりの迫力に意識を奪われた俺らを我に返させたのは、奴のミサイルがこちらに向く音だった。

「まずいっ！！」

そう言葉が出た時にはすでにミサイルは放たれていた。

咄嗟にその場に屈む。迫るミサイルは俺の髪を撫でる様に紙一重のところを後方へと飛んでいった。

刹那、

ボゴドォォォォォン！！

激しい爆音と爆風が俺の背中に当たる。

手をかざしながらそちらの方に目をやれば、燃え滾る炎に包まれたギルチックの残骸が、見るも無残な姿で散らばっていた。

「……敵も味方も関係無しかよ……」

「アキ！　来るよ！」

俺がぽつりと漏らした言葉が風に消える前にリコが声をあげる。

見れば奴が二射目のミサイルを装填したところだった。

あんなの食らうわけにはいかないな……よし！

俺は頭の中で一つの作戦を思い描いて、赤セイバーを構えた。

瞬間、ミサイルが俺らへ向けて放たれる。俺はそれに合わせて床を蹴った。

「待ってアキ！　もう少し相手の動きを見てから！」

リコの言葉が耳に入るが、俺は脚を止めなかった。

大丈夫、ちゃんと考えがあるんだ。

迫るミサイル。しかし、俺はその動きをよく見て寸ででかわす。

奴はミサイルを撃った後すぐには二射目を撃てない。だから一発目を避けてしまえば、間合いに入る事は出来ると考えたのだ。それに懐に入られたらミサイルも撃てないだろう。

俺のその考えは正しかったらしく、奴はミサイルを撃ってこない。

よし！　これで後は奴の懐に飛び込んで一気にぶっ倒す！

全てが計算通り。そう考えた直後だった。

「アキ！　後ろ！！」

リコの声が俺を思わず振り向かせる。

そこには、

「バカな！？　ミサイル…！？」

刹那、

ばごぉぉぉんっっ！！

「ぐがはっっ！！？」

爆破の瞬間、咄嗟に右横に跳び逃げたのだが、もろに爆発に巻き込まれた俺はそのまま吹き飛ばされ、数メートル離れた床に打ち付けられた。

一瞬意識が遠くなる。しかし、本能がなんとかそれを食い止める。

くそぉぉ……痛ぇぇぇ……！！

なんとか意識を右手に繋いで、震えながらも左腕の端末に指を添える。

数回端末の液晶ボタンを押すと俺の体が緑の光で包まれた。

少しずつ痛みが和らいでいくのを感じる。

どうやらレスタが効いてきたらしい。

顔を上げてみれば、リコがやつに向けてギゾンデを放って、狙いを俺から遠ざけていてくれた。

よし……！　この隙に奴に攻撃を……！！

俺はなんとか足を立たせて、赤セイバーを握る。

俺のレスタじゃあ完全回復にまで至るには時間が足りなすぎる。だけど、そうは言ってられない。リコがいつまで持つか分からないんだから。

俺が脚に意識を集中させて一気に距離を詰めようとしたその時だった。

っっ！？　なっ！？

奴に気づかれてしまったらしく、こちらに体の正面を向けた戦車アンドロイドは、俺に向かって再びミサイルを放った。

くそっ！！　チャンスだったのにっ！！

幸い距離がまだあったので、避けることは出来た。さっきならこのまま突っ込んで行ったところだが、さっきのミサイルの謎のこと

もあるので一度リコと合流することにした。

リコは壁の陰に隠れてミサイルをやり過ごしていた。俺もその陰に飛び込む。

「大丈夫！？　まともに爆風を浴びちゃったみたいだったけど？」

リコが心配した顔で俺を覗き込む。

「ああ、なんとかレスタで動くことは出来るから大丈夫だ。だけど、さっきのあいつのミサイルは何なんだ？　俺は確かに避けたのに」

俺の言葉にリコは俺の疑問を打ち解いてくれる言葉を告げた。

「あいつのミサイルは、ホーミングなのよ」

「ホーミングっ！？」

俺はその言葉をオウム返ししてしまう。

そうか、それで一度避けたミサイルが俺の後ろに付いたってわけか。だけど、それじゃあ俺が考えた作戦は無理だ……。

「さっき、ギゾンデ撃ってみたんだけど、あんまり効いてないみたい。しかも刺激を与えるとアイツ、攻撃を増してくるのよ。フォース級の力があればまだなんとかなるかもしれないんだけど……」

リコが壁から顔を出して奴を警戒しながら、そう言った。

くそっ！　どうしたらいいんだ！　戻るにも他にロックが解除さ

れてるドアは無かったし、またあの大勢のアンドロイド共の中を突破しなきゃならない。今の体力を考えるとそれは難しい……。こいつをどうにかして、あのドアに進むしか今は残されていない！

俺がどうしようもない状況に苛立ち始めていると、リコが突然壁から体を出した。

「お、おいリコ！　何をする気だ！？」

「いい考えが浮かんだの！　ちょっと、危険だけど、今はこれしか手は無いと思う……。アキはここにいて」

そう言うが早いか、リコは奴に向かって床を蹴った。

「ま、待てよ！　……一体…」

俺の言葉にリコは止まることなくそのまま突き進む。

迫るリコに奴は気づいたらしく、体をリコの正面に向けると、背中のミサイルポッドを開放させた。

幾本ものミサイルがリコという一点を目指して向かってくる。

ギリギリまで引き付けられていたミサイルを、リコはまるで屈折した光のような動きでそれをかわした。目標を見失ったミサイル共はあちらこちらへと散らばっていく。

よし！　なんとかミサイルは回避出来たみたいだな。だけど、リコはどうやってあの堅物を仕留めるんだ？

俺がその疑問を頭に浮かべた時、目を疑う光景が飛び込んできた。リコがその場に立ち止まっているのだ。

「…な、何やってるんだリコ！　早くしないとミサイルがまた来るぞ！」

しかし、俺の声が届いていないのかリコは動く気配を見せない。

くそ！　何考えてるんだリコは！？　このままじゃミサイルがリコに！

そう思うや否や、もう一度リコを定めたらしく、弧を描いたミサイル共が再度一点を目指し始める。

俺も壁の外へ出る。とにかくあのミサイルをどういうにかしないとっ！？

間に合うか分からない、しかし俺はギゾンデを放つため、右腕に力を集めようとした。が、その刹那、リコがその身を宙に浮かせた。

え？　一体……そうか！

直後、

ばごぉぉぉんっっ！！

俺がリコの考えが理解出来たその瞬間、目の前で大爆発が起こる。

リコはっ！！？

目を皿のようにして彼女の行方を捜す。

どこだ！？　どこだ！？　どこだ！？　どこ、いたっ！！

視界の端に捉えることの出来た彼女は、木の葉のように大きく宙を舞っていた。

それを捉えた俺は意識することなく、リコの落下予想地点へ駆ける。

「まーーにーーあーーえーーーーーっっっ！！！」

思わずして声が出ていた。しかし、その叫びに反して彼女の落ちる速度の方が俺の足より速い。リコと床との距離がみるみる縮まっていく。

頼むっ！　俺の足！　届かせてくれーーーーっ！！

俺は右足で思い切り床を踏み切ると体を宙に浮かせて頭から落下地点へと飛び込んだ。そして、空中で体を１８０度捻る。

直後、俺の腹部へ重い衝撃が生まれた。

「……ま……間に合ったぁぁぁぁ～～～～……」

「う…う～ん……」

お？　気が付いたか？

俺はリコをなんとか床への落下から防いだが、爆風に巻き込まれた事もあるのか彼女は気を失っていた。

「わたしは……えっと……どうなったんだっけ？」

まだ意識がはっきりとしないのか、トンチンカンな事を溢す彼女。

「覚えてないのか？　あの戦車みたいなアンドロイドのミサイルの爆風で吹き飛ばされたろ？」

俺の説明にリコはしばらく顔をしかめて……。

「あ～～～～！」

ポンと手を叩いた。

「思い出したみたいだな。たく、あんな無茶しやがって」

リコがやった事。それは奴のミサイルを奴自身にぶつけて、自爆させようってものだった。

確かにミサイルの爆発力ならあいつの堅い装甲も突き破れるし、ミサイルの問題も一緒に解決できる。結果奴は自分のミサイルで倒れた。だけど、それはあくまで結果論で、リコの行動が危険きわまり無い事だってのは明白だ。重症になりはしなかったけど、俺がリコの作戦に気づかずにいて、床にまともに落下してたらどうなってた事やら……。

「はは、申し訳ない。で、あたし無事だったってことは、アキが助けてくれたの？」

「まぁな。無傷ってわけじゃなかったけど、俺のレスタで治ったくらいだから問題はないだろう」

そう俺の言葉を聴き終えたリコは、口の端を伸ばし目じりを下げて、俺に満面の笑みを見せた。

「ありがとう。アキなら助けてくれるって思った」

その言葉を紡いだ彼女を俺は直視出来なかった。

お、俺は何をドキドキしてるんだ……。

「そういえば、ここはどこなの？」

俺がどぎまぎしてるのを他所に、リコはこの部屋を見渡して言った。

あの戦車アンドロイドを倒した後、俺はリコをこの部屋に運んだ。戦車アンドロイドの残骸が二次爆発するかもしれなかったからだ。次の部屋でまた敵がわんさか現れるかもしれなかったが、俺はそこを覚悟を決めて後にすることにした。リコを担いででも突破しようと考えていた。しかし、幸い、そこにはアンドロイド達はいなかった。だが、そのかわりにそこにあったのは……。

「……こ、これは…！？」

どうやら、リコも気づいたようだ。

俺とリコがいる部屋にあったもの、それは、森と地下空洞にあった物と同じあの柱だった。しかも、すでに柱には光が走り、唸る様な音を発していた。

俺もこの部屋に入った時はそれを目にして、驚いたが、リコを介抱する方が先と考えて、それは後回しにした。それに俺にはこれがなんなのか分からないし、柱の文字のようなものも読めやしないしな。

「しかも……何これ……？　この部屋の施設が柱を調べてる……？」

柱へと近づいていったリコが部屋全体を見渡しながら、そう呟いた。

確かに、この部屋にある柱には糸のように細いものから俺の太股の太さくらいあるコードまでが幾本も延びていて、この部屋のいたるところにと繋がっている。

リコは柱の根元に立ち、それを見上げていた。唇が小さく動いている。今まで二回の柱を見てきて、幾らかあの文字が読めるようになったんだろうか。俺には相変わらずただの模様にしか見えないんだけど。

「どうだ？　何か分かったか？」

「……詳しくはまだ……」

後ろから近づく俺に、振り向くことなくそう返した彼女は、しか

し、こう続けた。

「ただ、この柱の状態を見て、確信が持てた。これは記念碑なんかじゃない。ほら、柱の根元見て」

そう言われて、目を落とすと、確かに。地面の地肌が見える。柱がこの施設の中にあるというより、柱の周りに施設があるといった感じだ。

彼女は更に続ける。

「記念碑がこんな地下深くに建てられるはずはないし、ましてやこんなにまでして調べられている訳が無い。この施設はこの柱を調べるために作られたと言ってもいいかもしれない。そうなると、この柱には政府がこの施設を極秘裏としてまで作った大きな秘密があるはず。そして、それは一般居住者には知られてはならないほどの秘密……。一体政府は何を知って、何をしようとしてたの……？」

この場には俺とリコしかいない。しかし彼女の口ぶりは俺に対して話しかけるといった感じよりも、むしろ、自分に対して話しかけ、整理を付けている様だった。彼女は相変わらず柱を凝視している。

そんな自分でも混乱してしまうほどのショックを受けたんだろうか、リコは……。

俺は、何をしたらいいのか、どんな言葉を投げかけたらいいのかさえ頭に浮かぶことが出来なかった。彼女のそんな様子が俺の思考回路を止めていた。

「ああ～、もうちょっとまともなツールがあったらこの柱の文字を解読して、政府が何を知ったのかくらいは分かるはずなのに……」

その時、リコの歯がゆい口調の言葉が俺に閃きを与えた。

そうだ！　ツールならあるじゃないか！

俺は閃いた言葉をそのままリコに伝える。

「リコ！　ツールならあるじゃないか！　ここはパイオニア１の研究施設なだから、そこらへんのコンピューターに入ってるんじゃないのか？」

俺の言葉にリコは顔をパッと明るくする。

「そうよ、そうよ！　つい、自分の手持ちツールだけでやり遂げようとしてたからうっかりしてたわ。それに、この柱を調べてるってことは、この柱の文字の解析情報とかも残ってるかもしれない！」

リコはそう言うが早いか、近くのモニターの下へ行って、カタカタとキーボードを叩き始めた。

俺もそのすぐ後ろへ付いて、その様子を伺う。

「……よし、これで後はパスコードを入力すればデータが取り出せるはず！」

しばらくキーを叩いていたリコが、ふっと手を止めた時に言った言葉はそれだった。画面にはパスコードを入力するブラウザが開い

ている。

「あたしの知ってるパスコードで開けばいいんだけど……」

そう言って２０桁近いコードを慣れた手つきで素早く入力する彼女。最後にエンターキーを押した。

『ＥＲＲＯＲ！！』

出てきた文字はこの一言だった。

「う～～ん、これじゃないのか～。あたしが知ってるコードの中でこれ以上重要なコードっていうのは無いから、解析情報を手に入れるのは無理みたい」

うなだれたリコは俺のほうに振り向いてそう一言。

「まぁ、最重要機密みたいだし、しょうがないんじゃないか？」

「……そうね、悔しいけど、手に入らないものはしかたない。使えそうなツールだけ頂いて、自分で解読することにしましょ」

素直に諦め切れない様子のリコはツールを取得するブラウザを開こうと、エラーの表示のあるブラウザを閉じようとした。しかし、

「え？　何これ？　……再度コードを入力する場合、またはこのブラウザを閉じる場合双方ともＩＤカードのスキャンが必要ですぅ？？　こんなの知らないわよ？？」

リコはモニターの突然の警告に面を食らった様で、目の前の文字

を棒読みした。

「どういうことだ？」

「つまりは、ＩＤカードを通さないと他の作業がまったく出来ないみたいなんだけど、あたしこんな画面みたことないし、聞かされてもないのよ」

「ということは、ツールも手に入らないってことか？」

「そゆこと。まぁ他のコンピューターから入れば問題はないと思うけどね」

なるほど。じゃあ特に問題はないってことか。

俺がリコの言葉に安堵の息をついた時だった。今リコが操作していたコンピューターのモニターに変化が起きた。

俺とリコはそれに気づき、モニターを覗き込む。

「なになに？　後３０秒以内にカードのスキャンが認められない場合、不正アクセスと見なし、セキュリティが発動します……って、うそ！？」

「お、おいリコ、早いとこＩＤカードとやらを通せよ！　またギルチックの大群とかが転送されてきたら厄介だぞ！」

「そんなこと言ったって、そんなＩＤカードなんて物あったらとっくに使ってるわよ！」

「……無いのか？」

「……うん」

俺らがそうやってただ慌てている間にも時間は確実に過ぎていき、そして、

「エマージェンシー！　エマージェンシー！」

部屋が急に赤く点滅しだすと、部屋中にその声が響いた。３０秒が過ぎたらしい。

「こうなったらまた強行突破しかないわね！」

「そうだな！　大分体も休まったし、やってやるさ！」

俺とリコはそれぞれの得物を構えると、どこから敵が現れてもいい様に、互いの背中を合わせながら、辺りに気を配り始めた。

……さぁ、どこからきやがる……。

鳴り響くサイレンとコンピューターの声。しかし一向に敵が転送されてくる気配がない。

「どうしたんだろう……来ないな」

「油断しちゃダメ。必ず来るはずだから！」

互いに声を掛け合った、その直後だった。

ヴォォォォン！！！

突然床下から機械の顔をつけた柱が数本飛び出してきたのだ！

「な、なんだこれ……？」

俺らを囲むように出てきたそれらは息つく間さえなく、狙いをこちらに合わせる。

来るかっ！？

顔付き柱の動きに防御の構えを取って、攻撃に備える。どんな方法で攻撃してくるか分からないから油断が出来ない。

しかし、衝撃は後方、俺の頭の後ろから生まれでた。

言葉どおりに裏をかかれて、俺は思い切り床へと吹き飛ばされた。体に走った痺れから電撃かなんかの攻撃だろうか。

「……くっそ～～……後ろからだなんて卑怯な……」

そう呟いた俺だったが、見事にその卑怯な攻撃を避けているリコの姿が目に入って、やっぱり自分の腕の無さもあるんだと軽く反省した。

「大丈夫？　こいつらの攻撃どこから来るか分からないから気配を全方向に集中して！　そうすれば攻撃される瞬間、一瞬だけどこから攻撃が来るか分かるから」

簡単に言ってくれる……。

リコの親切なアドバイスに心打たれた俺は、とりあえず体勢を立て直すことにした。

ふぅ……気配、か……よし！　やってやれないことはないっ！！

俺は気合一発！　とりあえずは攻撃と、赤セイバーを握り締めて、一番身近にあった顔付き柱に斬りかかった。

しかし、その瞬間、顔付き柱は床下へと引っ込んでしまった。俺は予期していた硬質の抵抗の突然の消滅に赤セイバーで空を斬り、力余ってバランスを崩してしまった。

「くそ、攻撃も出来ないのかよ……！」

舌打ちをした俺のもとにリコが来た。

「大丈夫？　ねぇ、今入ってきたドア調べたんだけど、ロックかかっちゃって、この部屋自体から出れなくなっちゃたみたいよ」

「マジかよ！？」

リコの言葉に俺の心の中で焦りが生まれた。

つまりは、閉じ込められたってことか？　……退路は無しってわけだな。

頭の中でこの場をどう切り抜けるか考えた。ちらりとリコを見ると、周りを警戒しながら、やはり何かを考えている表情だった。

しかし、次の瞬間、俺はまたも体に電気が走るのを感じた。
冷たい床に頬擦りをする俺。
……どうやら考える間さえ与えてくれないらしい。
リコはちゃんと避けてるのに……気配なんてやっぱわかんねぇよ！　くそ！　こうなったら！
俺はその場に立ち上がると、赤セイバーを力強く握った。
「？　何かここを切り抜ける方法を思いついたの？」
リコの問いかけに、まぁ見てろ、と、彼女の横をすり抜けて、手に持つ得物を振り上げる！
ベガジャンっっ！！！
俺の赤セイバーは心を晴れやかにする音を奏でた。
「な、何してるのよっ！？」
その光景にリコは悲鳴のような声を上げる。
「何って、この！　見れば分かるだろ。てや！　ぶっ壊してるんだよ。この頑固なコンピューターをな」
俺が攻撃した対象は床から出てきた柱ではなくて、部屋の周りに設置されていたいくつものコンピューターだった。

「ちょ、ちょっと、そんな事したらロックも解除出来なくなっちゃうわよ！」

「そしたらドアごとぶっ壊すまでだ！」

「そんな無茶苦茶な……」

リコの静止の声を振り払って、俺は部屋のコンピューターやモニターに攻撃をし続けていった。

そして、幾つ目かのモニターに赤セイバーを振り下ろした、その時だった。

そのモニターから火花が散ってショートすると、それは部屋全体に走っていって、いたるところで爆発が起こり始めた。

「おっし！　ぶっ壊れやがった！」

「もう！　取り返しが付かなくなるわよ！」

そうリコが声をあげたとき、部屋に爆発の音とは異質の音が響いた。

そちらの方に目をやるとドアのロックが解除されていて、グリーンのランプが光っていた。

「ほらな」

俺は得意げにリコを見た。

「非常識だわ……」

「俺にとっては常識だよ。じいさんから聞き分けの無い機械は殴って聞かせろって教えられたしな。前に組んでたキャストにも効いた事がある」

「はぁ、尊敬するわよ。アキ」

「お褒めに頂き光栄です。さ、行こうぜ」

その時だった。

シュワワァァァン！！

頭上で何かが転送されて来ようとしていた。

その規模は、あの戦車アンドロイドの時の比では無いほどにデカかった。

「……こういう事態もアキの常識？」

「いや……教えられた記憶はないな……」

二人とも天井を凝視しながら言葉を交わす。

直後、その物体は転送を完了したようだった。

「まずい！　早くこっちへ！」

俺はリコの手を掴んでロックが解除された部屋へと飛び込んだ。

刹那！　俺等がいたその部屋に巨大な無機質の塊が降って来た！

「今度はどんなやつが飛ばされてきたんだ……？」

ドアから見えるその塊は一部しか見ることが出来なくて、その巨大さを伺うことが出来る。

「やっぱりコンピューターを壊したのがマズかったんじゃないの？」

う！？　……返す言葉がない。

リコの言葉にしかし、反省する間も相手は与えてくれないらしく、ギラリと赤く光ったカメラアイがドアの向こうからこちらを覗いていた。

このままだと、この部屋自体も危ない。逃げ道を探さないと！

入ったこの部屋はどうやら袋小路だったらしく、入ってきたドア以外の入り口は見当たらなかった。

目を皿のようにして、何かこの事態の突破口になるような物をはないかと探していると、俺の目にそれは飛び込んできた。

「リコ！　これだ！　こいつで逃げよう！」

俺が見つけたのは転送装置。どこへ飛ばされるのかは分からないが、今はこれを使うしか手はない！

俺はリコを促すと、一緒に転送装置へと乗り込んだ。

「さ！　とっとと、飛んじまおうぜ！」

「ちょっと待って！　この転送装置変よ……。転送先が登録されてない……？　違う、表示されてないだけ……？　なんなのこれ？」

「どうしたんだ？」

装置のパネルに目を落とすリコは、それと睨み合っているだけで微動だにしなかった。

俺もパネルを覗いて見るが、確かに普通なら表示されるはずの転送先が空欄になっている。

「使えないのか？　この転送装置？」

「ううん、転送ポイントはちゃんと設定されてるみたいだから動きはするんだけど、そこがどこだか分からないのよ。ポイントからすごく地下だったって事は分かるんだけど……」

そういうリコの声はボソっとした感じで、何かを考えている様子だった。

確かにこの転送装置は不気味だけど、今はこれしか道がない。それにこのままだと、時機に隣の化け物が、

と、その事を頭に過ぎらせた瞬間だった！

ばごぉぉぉんっっ！！

部屋の壁が吹き飛んだのだ！

立ち込める煙の向こうに見えるのは、巨大なシルエットと赤く光るカメラアイ。

あいつ、壁をミサイルか何かでぶっ壊しやがった……！

「いくぞ！　リコ！」

俺はリコの横から腕を伸ばしてパネルのボタンを押した。

瞬間、俺は意識が遠のいていくのが分かった。

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅ・・・

Chapter ?_b（後書き）

2006年　制作
2010年　加筆・修正

Chapter ?_a

「……着いたのか？」

目を開けるとそこは今までの機械めいた空間とは違う、むしろ前にいた地下空洞に雰囲気が似た空間が広がっていた。だけど、所々にコンテナが置いてあるからパイオニア１と関係がある場所には変わらないだろう。

横に目をやればちゃんとリコも転送されてきていた。

「……ここ、どこなの？」

首を左右に振って辺りを確認するリコ。

「さぁ、それは分からないけど、パイオニア１の地下のどこかじゃないのか？　もしかしたら、あのドラゴンと戦った場所の近くかもしれないし」

その言葉にしかし、リコは首を傾げて考え込んだ。

「……それは、ないと思う。さっきの転送装置に表示されてたポイントはドラゴンがいたところのポイントとは比べられない程地下だったわ……」

そういうと、またリコは俯いて静かになった。

そんなに地下なのか……？　一体パイオニア１の連中はどれくらい深い穴を掘ってるんだ？　そして何のために……？

俺は背筋に寒いものを感じた。

あのドラゴンや巨大ワームがいた地下空洞にも驚いたが、今考えるとそれ以上にそこにパイオニア１の手が入っていたことが不思議でならない。それにあの地下研究所だ。あんな地下に作る必要があったのか？　リコも言っていたがまるで極秘裏に何かを研究しているようだった。

……もしかしたらラグオルの地下に何かあるのか……？

考えれば考えるほど頭が混乱していくばかりだった。

俺とリコ、それぞれがそれぞれの考え事に口を紡いでいて辺りには沈黙が流れていた。

その時、俺は今いるこの空洞の端に何か異質な存在があることに気づいた。

「おい、リコ、あれなんだ？」

指をさした俺に合わせて、リコもそちらへと視線を送る。

そこにあったのは、一つの黒い壁。

周りは岩に囲まれている中で、その黒い壁が異質なオーラの様なものを発していた。

「なんなのかしら、これ……？」

良く見れば、その黒い壁の周りだけ岩とは質感の違う壁の様なものが広がっていて、この地底の中に何か巨大な建造物があるかのようだった。黒い壁はまるでその建造物の扉のように見えてきた。

「ここさっきの施設よりも地下なんだろ？　これもパイオニア１の施設なのか？」

壁を手の甲でコンコン叩きながら言う俺に、リコは小さく首を横に振った。

「ううん。パイオニア１の技術じゃあこんな素材の壁は作れない。これは多分……ラグオルの先文明！」

俺はリコの言葉に耳を疑った。

「先文明って、たしかラグオルにはそういった類は見受けられなかったんじゃなかったのか？」

「そう。たしかに先文明はなかった。そう聞かされていた。けど実はあったのよ！　ラグオルに着く前か着いた後でかは分からないけど、政府はこの先文明を発見した。そしてこの事を一部の人間にのみが知り得る情報として、極秘裏に先文明の調査研究を行っていたのよ」

リコの口から紡がれる言葉は静かに、しかし、強く放たれた。

「でも極秘裏にする理由って一体なんだ？　どうして政府はそんな情報操作みたいなことをしなきゃいけないんだよ？」

「……多分、それが分かれば情報を操作した理由も、あの地下施設の事も、地上の動物たちが急に凶暴になった理由も見えてくると思う」

そういうとリコは、近くに打ち捨てられているように転がっていた端末機を操作し始めた。

「それは？」

「多分、この建造物の中に入っていった先遣隊が残していったデータが残ってると思うの。そのデータにあの柱の情報があるはず。そうすれば、柱の文字が読めるようになるし、政府が何を掴んでいるのかもわかるはずよ」

そういうとリコはその端末のデータを自分の右腕の端末に取り込んでいった。

その間俺は辺りを見渡した。

周りにはパイオニア1の先遣隊の物だろう、コンテナが転がっているがその中身は見受けられない。全て持ち出されたのだろうが、ここに人っ子一人いないのはどうにもおかしい。待機している兵や、この建造物を調査している者がいてもおかしくない。

パイオニア2で聞いたパイオニア1の人々が行方不明になった事は本当の事のようだな。原因は分からないがここまで人気がないとその情報の信憑性は高まるばかりだ。その原因もこの建造物と何か関係があるんだろうか？

俺は異様なオーラを放っている建造物を見上げた。さっきから何かに背筋を撫でられているような感覚にかられて仕方ない。

それにしても先文明の建造物か……相当年代物なんだろうな。まるで遺跡みたいだな……んっっ！！！？

と、俺はそこで体に電気が走ったようになって頭が覚醒し、目を見開いた。

……これが……あの、遺跡なのか……？

確かに、噂で聞いたとおりに地下深くにこの建造物は存在している。そして、この異質な雰囲気……もし、噂が本当ならこの中にはとんでもないエネミーが潜んでいるはずだ！

俺はそこで、もう一つの事柄を思い出した。

そういえば、オービックの奴はここにリコを俺に連れてこさせようとしたんだよな？　帰ってあいつの顔面に一発ぶち込んでやる事で頭がいっぱいになってて忘れてた。けど、なんであいつは遺跡にリコを連れてきたかったんだ？

よく考えれば遺跡の調査ならわざわざリコと来る必要はないし、過去に来る理由もない。まぁ、そんな依頼はもうどうでもいい。こんなヤバイところはさっさと後にして、セントラルドームへの転送装置なり何なりを探すようにリコに言わないと！

しかし、俺がそう思った直後にリコは立ち上がった。

「少しだけど、柱の文字が解読できたわ」

「あ、いや、文字の解読もいいんだけど、」

「まぁ、ちょっと聞いてよ」

俺の声は彼女の続ける声に遮られてしまった。

「いい？　今までの情報とここにあった情報とツールを使って、柱の文字は『光…影…対あって無く…存在…無…無限…印を結ぶ…ムゥト　ディッツ　ポウム』らしいのよ？　で、最後の言葉はあの柱と関係があるんじゃないかと思うのよ。ほら、見て。扉らしきところに地上と地下空洞と地下施設の柱にあった紋章みたいな物が三つ並んでるでしょ？」

そう言われ、扉を見てみると、確かにそれっぽい紋章がそれぞれの柱が発していた赤、青、緑の色で輝いている。

てことはやっぱりあの柱は記念碑なんかじゃなくって、この遺跡と関係のあるものだったのか……？

俺はその紋章の一つに軽く触れた。

刹那、

ぷしゅーーー！

静かだった辺りに空気の抜けるような音が響くと、その黒い壁はやはり扉だったらしく、上方へと吸い込まれていった。

「なっ！？　……あ、いた……？」

開いた大きな入り口。しかし、通路が長いようで奥が闇色で覆われていてそれ以上先が見えない。

「……うそ、さっきは触っても何も起こらなかったのに……もしかしたらあの『ムゥト　ディッツ　ポウム』っていうのが呪文のようなキーワードになってたのかしら……？」

「とにかく、ここを離れよう！　中から何が出てくるか分からん！」

「少し中を調べてみましょう。メッセージカプセルも置いたし、中の方に人がいるかもしれないし」

そう言って、大きく開いた口の中に入ろうとしていくリコの腕を俺は掴んだ。

「待てリコ！　ここはヤバイんだ！　今までのエネミーなんて洒落にならないほど……の……」

その時だった！

急に俺は自分の体が言うことをきかなくなってしまった。

意識はしっかりしている。しかし、指先一つ動かすどころか、声さえも出すことが出来なくなっていた。

なんだ？　一体何があったっていうんだ？！

「ん？　どうしたのアキ？　顔色悪いよ？」

俺の異常にリコも気づいてくれたらしく、心配そうな顔でこちらを覗いてくれているのだが、本当にどうすることも出来ない。

そして、更なる異変が俺の体に起きた。

ドクンッ！！

心臓が殴られたかのように大きく鼓動したのだ。

それを感じた次の瞬間には意識さえも失われていくのが分かった。俺の名前を呼び続けるリコの声と同じように、意識が遠のいていった。

ワレ　ノ　モト　ヘ　コ　イ

俺は一体どうなったんだろう……？

いつの間にか俺は意識を取り戻していた。

しかし、目の前に広がるのは赤黒い空間。そして俺の体に伝わる感覚は浮いているような沈んでいるような不思議な感覚だった。

なんだかどこかでもこんな事あったような……。

この感覚に俺は覚えがあった。

どこだったろうか……？　それほど昔じゃあない。むしろ最近に味わった感覚……。

記憶の引き出しを出し入れしてみる。

しばらくして俺は閃いた。

そうだ！　この感覚はデ・ロル・レを倒した後に眠っちまって、その時見た夢に似てる……てことは、これも夢なのか……？

確かに、目の前の光景もあの時の気持ち悪い夢そのものだった。

くそ！　なんで夢なんか見てるんだ！？　早くリコに遺跡の危険性を伝えないといけないのに！

俺は焦った。

これが夢なら俺は寝ているか気絶でもしていて、リコはその場にいてくれているだろう。けど、遺跡の扉は開いてしまった。中から強力なエネミーが続々と現れてもおかしくない。早くあの場所から離さないと！

とりあえず体を揺すってみる。しかし、周りの景色が変わる事はなかった。

頬を叩いてみる。叩いた箇所がジーンとしただけだった。

逆に目をギュっとつむってみた。もう一度目を開けた時目に入っ

てきたのは、やっぱり赤黒く気色の悪い光景だった。

あ〜！　どうやったら夢から覚めれるんだ？！

そうやって色々な動きを試行錯誤していた時だった。

ザシュッ！！

突然の鈍い音と共に俺の左腕に激痛が走った！

ぐあああぁぁぁーーーーっ！！

俺は頭の中が真っ白になった。

い、一体、なんなんだ？！

咄嗟に左腕を押さえた右手に熱く湿った感触が生まれる。どうやら傷は深いらしい。

辺りを見回してみる。すると、いつの間に現れたのか目の前に、白い人形のシルエットのようなものが浮いていた。そいつの手には長い刃を持った得物が握られている。

こいつがやったのか！　……まてよ……？

俺は目の前の白影に戦意を向けた。が、その時ある事が傷の痛みよりも頭の中を支配した。

……これは、夢じゃないのか？

夢の中なのに痛みがあるのはおかしい。この傷の痛みはあまりにもリアルだ。そういえばさっき頬を叩いた時も痛みはあった……じゃあ、ここは一体どこなんだ??

夢じゃないと思うと改めて混乱してくる。こんな空間が存在する事もにわかに信じられない。

が、その事を整理させてくれる時間は与えられなかった。目の前の白影は俺に刃先を向けているのだ。

くそっ！　とりあえず、こいつをどうにかしないと、ここから出ることもままならないな……。

その時だった。

ドクンっ！！

心臓が殴られたような鼓動をして、直後、まるで心臓が握りつぶされそうな程苦しくなった。

こ、これは……遺跡の前で感じた感覚と同じ……？

そして、その鼓動は俺の心臓の音だけでなく周りの空間からも同じリズムで腹に響く鼓動がしていることが分かった。

響くその音は徐々に大きくなっていって、俺の中に入っていく。

やめろっ！　入ってくるな！　俺の中に入ってくるなぁーー！！

俺はアイテムボックスから赤セイバーを取り出して、滅茶苦茶に

それを振り回す。

その時、頭の中で声がした。

タタ　カ　エ　　タタカ　エ　　タタカエ

来るんじゃねぇえええーーーーーっ！！！

右手に握ったそれを構えて、刃先を白影に向ける。

今この場にはあの白影しかいない。あれがこの気持ち悪さの、この空間の原因に違いない！　あいつをぶっ倒すっ！！

狂いそうな意識を目の前の敵にのみ集中する。そのせいか、気持ちの悪いのが治まった気がする。

よし！　この間にやってやる！！

足場が無くて、浮いたような感じになっているが、なぜか体が思ったとおりに動く。それで俺はしっかりと白影に体を向ける事が出来ている。

おかしな感じだけどそんな事考えてなんかいられない！　さぁ、かかって来いよ！

白影も構えをとっているが、警戒しているのかさっきの用に襲い掛かってこない。

なら、こっちからいってやる！

赤セイバーを振りかぶり、白影に近寄る。足は動いてないのだが、まるで背中に何か推進力があるかのように、勢い良く前へと進んでいく。

白影が間合いに入る。

捉えたっ！！

瞬間、俺は思い切り赤セイバーを振り下ろした。

が、それは空を斬るだけで、俺はバランスを崩した。

白影は風になびく葉のような動きで右へとワンステップ。紙一重で俺の剣戟を避けたのだ。

マズイっ！！？

俺の本能が危険を察知する。

視界の端にやつの動きが見える。避けた動きから流れるように攻撃へと転ずるそれは、戦っているというのに見惚れてしまいそうになる程だった。が、そんな事をしていられるわけもなく、俺は反射的に赤セイバーを右方向に立てる。

刹那！　散らばる火花が宙に浮く！　俺の赤セイバーと奴の得物がぶつかり合った。攻撃を受け流そうとしたのだが、バランスが悪かった事もあって、力を流しきることが出来ずに余った威力が俺の体に届いた。

がはっ！？

体に熱いものが走る！　痛みが一瞬頭の中を支配するが、理性でそれを抑えこんで白影を見据える。

なんて重い攻撃だ……！

と、その時、白影が続けざま攻撃をしようとしてくる光景が目に入ってきた。

くそ！　そして無駄の無い動きかよ！

俺はそれをなんとか体を転がらせて回避を試みる。

瞬間、脇腹の横を鋭い物が空気を斬る。どうやら紙一重でかわせたようだ。

俺はそのままもう少し間合いを取って、態勢を立て直す。

……こいつ……すごく強い！

一瞬の出来事だったのに、俺はすでに息が上がってきている。

こいつは力押しじゃ無理だ。何か策を練らないと……！

しかし、その策の糸口が見つかる前に白影に変化が見えた。

奴の左腕が赤く光りだしたのだ。

今度は一体何をっ！？

そう思った矢先だった。

ドゴォーーーーンっ！！

突然目の前が光で遮られる。と同時に猛烈な熱さに包まれて俺は吹き飛ばされている事に気付いた。

朦朧とする意識の中、途切れそうなそれを歯を食いしばって繋ぎとめる。

……こいつ……テクニックみたいな攻撃までしてくるのかよ……！？

体中に負わされた酷い火傷が俺に絶え間なく痛みを与え続ける。俺はしかし痛む腕を伸ばしてレスタで応急処置を試みた。

幸い今の攻撃で吹き飛ばされた分間合いが大きく広がって、白影も間合いに入ってこようとする気配を見せない。

俺のショボいレスタの光が全身を包むと、体を蝕んでいた痛みが和らいでいくのが分かった。しかし和らぐのが精一杯のようで、それ以上は回復の速度が大きく鈍る。

とりあえず体を動かす分には問題ない。やってやるさ！

多少残るところどころの痛みを振り払って構えをとる。

さて、どうする……距離を取ればさっきみたいな攻撃が、近接

しても奴の方が上手……完璧だよな。

どう考えてもつけいる隙も無い白影。そのままお互いに剣先を向けたまま暫くの時が流れた。

このまま動かないでいてくれたらこっちの回復も進んで、何か策も浮かぶかもしれ……！？

そんな考えが過ぎった直後だった。

白影がしびれを切らしたのか、勢い良く向かってきたのだ。

俺は咄嗟にガードの構えをとる。

刹那、お互いの得物がぶつかり合って甲高い音が辺りに響く。

速い！　後一瞬反応が遅れたらと思うと背中から汗が噴きそうだ。

勢いを乗せていた白影の攻撃はさっき受けた一撃よりも重かった。しかし、俺は膝を使ってその力を殺す。そして鍔迫り合いの状態から赤セイバーに力を込めて白影を突き放した。

と、俺はその時活路を見出した。吹き飛ばされた白影がバランスを崩したのだ。

今しかないっ！！

俺は勢い良く白影の懐に飛び込んでいく。

完全に赤セイバーの間合いになった。

もらったっ！！

俺は柄を思い切り握ると、赤セイバーが白影に当たる瞬間にありったけの力を込めて切り込む。

ガギィィィンっ！！

しかし、俺の腕に来た感触と耳に届く音はまたも得物がぶつかり合うそれだった。

くっ？！　防がれた！？

捉えたと思った白影の腹部には俺の赤セイバーを拒むように白影の得物が立ち塞がっていた。

ガードも隙無しかよ……！

奥歯をギリっとやった俺は、再度鍔迫り合いになった状態から白影を押しやって、間合いをとる。

しかし、

ビシュっ！！

離れざま弾かれた勢いを利用した白影の一閃が俺の脇腹を捉えた。

くそ！　弾く力が弱かったかっ！？

幸い深い傷ではない。俺はそのまま距離をとった。

一体どんな攻め方をすればいいんだ……。

正直さっきの決定的チャンスを決めることが出来なかったのは状況的にも精神的にもキツイ。

斬られた右脇腹を左手で押さえながらもしっかりと構えて白影を見据える。しかし、俺の精神状態を読んでなのか空けた間合いを一気に詰めてくる白影。

このまま押し負けるのか……。あんな状態からでも完璧にガードしてくるような奴に俺は勝てるのか……完璧に……完璧？

俺はその時奴が完璧ゆえに通じる攻撃方法が脳裏に浮かんだ。

これならいけるかもしれない！

俺は咄嗟に閃いたその方法を仕掛けるべく、腕の端末を素早く操作した。

かなり間合いを詰めてきた白影に向かって左腕を突き出す。

それを見た白影は勢いを殺してその場に止まった。

よし！　これで終わりにしてやる！　フォイエっ！！

その言葉の終わりと同時に俺の左手が光って、広げた掌から赤く燃え上がるボーリングの玉ほどの火球が白影に向かって飛び出した。そしてそれは一つではなく、五発の連続火球で白影に襲い掛かる。

得物の構えを変えた白影は、目の前いっぱいに広がっているはずの火球を前にしてしかし、動じる様子は見られない。

一発は避け、一発はその得物で弾いて、どの火球も白影に直撃する事はなかった。だけど俺も動じはしない。むしろこうなることは予想していた。

俺は五発目のフォイエを放った瞬間、そのフォイエに身を隠すように白影に向かい跳んでいる。

右腕を下にしての構えで突っ込む！

五発目のフォイエが白影の得物であらぬ方向へと弾かれる。しかし、その時にはすでに俺は奴を間合いの中に捉えていた。

殺気立てた眼光で白影を睨んだ俺は奴に向かって下方に溜め込んだ右腕の力を思い切り白影に向かって振り下ろす！

得物を体の前に立てて、俺の攻撃を受けようとする白影。

直後、力と力がぶつかり合う衝撃が生まれ、無い。

そのまま俺は白影の脇をすり抜ける。

その瞬間、アイテムボックスから赤セイバーを取り出し、体を反転させる。

目の前にあるのは、来るべきはずの俺の攻撃が来ずに完全に固まってしまっている無防備な白影の背中！

よっしゃあ！！　俺の勝ちだーーーーーっ！！！

叫びと共に繰り出した赤セイバーの一閃は申し分ない手応えを俺に与えてくれた。

俺の荒い息の音がする中で白影はその場に倒れ伏した。

ふぅ、なんとか、なった……。

作戦の成功に張り詰めていた緊張が和らいで安堵の息を吐く。

俺がやったこと、それは一度赤セイバーをアイテムボックスにしまって、素手で白影に向かっていったのだ。だから白影が受けようとしていた刀身はそこには無くて、俺の動きも止められず背後へと容易に付かせてしまったのだ。

もし、攻撃をフェイントして背後を取ろうとしたのなら多分失敗していただろう。フェイントは少なからず体のどこかに不自然な箇所が出る。完璧な相手ならそれを見逃すことは無いだろう。だから俺は赤セイバーを持っているつもりで白影に攻撃を仕掛けた。

でも、赤セイバーを持っていない事に気付かれたら終わりだ。そのためにフォイエで目くらましをして、手元が見えないように下方の構えを取った。その結果白影は受けの構えをした。完璧故に必ず受けてくれると思ったのだ。

さて、とにかくまずはこの異様な空間から脱出しないと。

辺りを見渡してみる。しかし、相変わらずこの空間に変化が現れる様子は無く、赤黒い世界が広がっているだけだった。

白影を倒すだけじゃあダメなのか……？

白影に目をやる。

そこには力なく倒れている白影の骸が……ないっ！？

俺は目をこすってもう一度白影が倒れた場所を見た。しかし、そこに白影の姿はやはり無く、果てない空間の景色が広がるだけだった。

一体白影はどこにいったんだ……まさか、まだ死んでなかったのか？

もう一度辺りを見渡そうと体を振り向かせる。

その時だった。

ブジュッ！！

なっ？！

突然腹部に熱い物が広がる。そしてそれを追うように痛みの感覚がそこを中心に輪を広げていった。

目の前にいたのは白影。そして白影の得物が俺の腹を深々と貫いていた。

うそ……だろ……？

体から血が漏れていく中で歯を食いしばる。だけど体は正直に立っていることさえ無理だと悲鳴を上げていた。

……ちく…しょう……こんなところで……死ねるかよ……！！

俺は崩れそうな体を支えるために白影の両肩に手を突く。

リコが……外に…いるんだ……リコを……地上に……連れて行かないと……俺が……守るんだ……。

遠のく意識。

抜けていく力。

そんな中で俺は必死に生へと執着していた。

リコが、リコの存在が俺を生へと繋ぎとめていた。

しかし、確実に死へのカウントダウンは進んでいる。直感でもう後は無い事を感じ取った。

ふいに足の力が抜けて膝から体が崩れる。

恐ろしい速さで鼓動する心臓。

死を目前にしているというのに、またもあの気持ち悪さが襲ってくる。

くそ……！！　最後まで……俺の中に入ってくるのかよ……！　この化け物野郎がっ！！

最後の力を振り絞る。あいつを、白影を一発ぶん殴ってやろうと顔を上げた。

しかし俺はそこで目を疑う光景が飛び込んできた。

思わず固めた拳を崩してしまう。

……リ……コ……？

そこにあったのは、白影がいるはずの俺の目の前にいたのは、リコだった。傷ついたボロボロのリコの顔だった。薄っすら涙を浮かべた笑顔のリコだった。

なんで……リコ……が……？

その光景の驚きを胸に留めたまま、俺の意識は完全にとんでいった。

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅ・・・

Chapter ?－a（後書き）

２００６年　制作
２０１０年　加筆・修正

Chapter ?－b　－END－

……暖かい……。

体を包むようにして感じる暖かさが最初に感じた感覚だった。

俺はゆっくりと目を開ける。

ぼやけた視界が徐々に鮮明になっていった。

「リ……コ……？」

やっとの思いで搾り出した声。そして声を出した瞬間ものすごく口と喉が渇いていたのが分かった。

虚ろな視界の中に映っていたリコの顔が泣き崩れていくのが見えた。

「アキ……！？　……よかったぁぁ……！！」

そう言いながら彼女は俺の上半身を起こして強く抱きしめる。

「……一体……俺は……どうなったんだ……？」

俺が溢した言葉にしかしリコはそれに答える事はなく、俺に体を預けている。

「おい、リコ……何があったか教えてく……れ……？　リコ？」

再度声をかけるが返事が無い。それどころか彼女はピクリとも動かない。

先まで俺を強く抱きしめていた彼女の両腕は、今は力無く彼女の体からぶら下がるのみだった。

彼女のにわかな急変に俺は彼女の背中と肩に手をやって顔をこちらに向かわせる。

と、その時、背中にまわした俺の右手になんとも言えない湿り気が生まれた。

リコの肩越しに自分の右手の掌を覗き込む。

なっ！？　これは！？

俺の右手に付いていたのは赤い、赤セイバーの様に真っ赤な血だった。

「おいっ！？　リコ！！　お前一体どうしたんだよっ！？」

怒鳴るように訊ねた俺に、しかしリコはやはり返事をしない。

こちらへと向けた顔は青白く、死んでしまっているものと見紛うばかりだった。

しかし、彼女のか細い呼吸がまだ生きているということをしっかりと証明していた。

俺はすぐさま左腕の端末を操作するとレスタをリコにかける。

淡い緑色が俺の右腕に集まる。その手を彼女の背中にかざしてやると、光は背中に移っていった。

「こんな体がぼろぼろなのに俺にレスタを……！　優秀なハンターのすることじゃないだろ」

光が彼女の体全体に拡がるも、未だにその両の目は閉じられたままだ。

くそっ！　俺が眠ったりなんてしなかったらっ！

奥歯をギリッとやるも、それでリコの回復が早まる訳は無いことは頭では分かっていた。だけど、自分を責めずにはいられない。

辺りを見回してもエネミーらしき姿や気配は無く、ただ殺風景な景色と目の前に小高い丘があるだけだった。多分、リコをこんな目にあわせたエネミーはもうどこかへ行ってしまったんだろう。だから余計に自分を責めるしかなかった。

しかし、リコをこんな目に遭わせたのはどんなエネミーなんだ……？

リコに目を落としながら、ふとその事を考える。ここまでリコがやられるんだ、相当の相手に違いない。特にこの背中の一撃が一番のダメージだと思うけど、まるで何かセイバー系の武器で一撃与えたような傷……。

何かが頭にひっかかる。

漠然とした嫌な予感。

一まとまりに出来ないその思いが頭の中を巡りまわる。

「……もしかしたら……この傷跡は……」

口に出してなんとか考えを形にしようと言葉を溢した、その時だった。

にわかに辺りが暗くなったのだ。

日が落ちた。というわけではないらしい。俺とリコの周りに陰が落ちたように部分的に暗がっていたのだ。

瞬間、背後に気配を感じる。

俺は空を切るようにその場で振り返る。

「な……なんだ……この……化け物は……」

そこにいたのは、巨大な、山ほどあろうかという体の化け物だった。

３つのドラゴンのような顔と首の上に人の形をしているモノが俺を見下ろし、その腕と思われる部分には塔のように長い刀身の得物を下げていた。

いつの間に現れたのかと一瞬混乱したが、すぐにその謎は解けた。

さっき俺が辺りを見たときに目に入った小高い丘がこいつだったんだ。寝ていたのか、倒れていたのかは定かじゃないが、こいつはさっきからここにいたんだ。

そして、もう一つ解ったことがある。それは、この化け物がリコをこんな目に遭わせやがったってことだっ！！

俺は傍らに置いてある赤セイバーを握り締めた。

頭の中じゃあ目の前のこの化け物にとんでもない危険をビンビンに感じて、本能が逃げろといっているようだった。だけど、俺はその本能に従わない。心の中のリコの復讐への思いが俺をそこに立たせていた。

「てめぇを、ぶっ倒すっ！！」

睨むような目付きをぶつけて深く腰を落として構える。そして、ドラゴンの頭の部分に向かって地を蹴った！

化け物は俺に気付いていないのか、意識自体が虚ろなのか、俺には反応せず動く気配を見せない。

そんなに殴られたいなら思いっきりぶった斬ってやる！！

易々と間合いに入った俺は振り上げた得物を勢いに任せて振り下ろす。

ザジュッ！！

確かな手ごたえと生々しい音が俺に届く。

どうだ！！　化け物野郎めっ！

してやったりと上の顔らしき方へと視線を送る。

しかし、

「……っ！？」

そこには痛がる様子はもちろん、反応さえもしていない化け物の姿があった。

その光景に歯をきしませるも、俺は再度攻撃を試みる。

ザシュッ！！

今度も手ごたえは確かなもの。だが反応は相変わらず無い。

「なら、これならどうだっ！！」

まるで相手にされていない感じに、俺はドラゴンの頭を連続で切り込む。

赤セイバーを振り下ろし、続けて刺し貫き、最後にそこから切り上げる。

その全てが完璧にドラゴン頭に決まり、これも手ごたえは感じられた。しかし、やはり反応がないのだ。

いいかげん頭にきた俺は上の方の人型に視線を送りながら右腕の

端末に手を伸ばした。

「こいつで目を覚まさせてやる！　ギゾンデっ！！」

力の蓄えられた右腕を化け物の顔に向ける。瞬間、俺は力を開放した。

走る稲妻。それは見事に奴の顔面らしき場所に直撃した。

さすがに一瞬揺らぐ化け物。そしてそれは俺のいる方へと顔を向けた。

そうだ！　俺を見ろ！　そしてリコへの仕打ちを悔いながら死ねっ！

俺は心でそう叫ぶと、もう一度奴の顔面らしきところへとギゾンデを放つ準備をした。

その時だった。

化け物が両手の得物を空へと掲げた瞬間、急に目の前が白く光ったのだ。

刹那、

バゴドォォォーーーンっ！！

激しい衝撃と熱風とが俺を襲い、体を中空へと運んでいた。あまりの衝撃に右手の赤セイバーを離してしまった。

なっ！？

その衝撃は一方向だけでは無いらしく、多方向から俺へと向かってきた。俺は空中でその波に飲まれ、一瞬体が無造作に丸められた紙くずのようになった気がした直後、地面に叩きつけられた。

声にならない言葉が口からこぼれる。全身から染み出す痛みが俺のか細い意識を摘み取ろうとしていた。

俺はそいつを歯を食いしばって繋ぎとめて、左腕の端末に右手を伸ばす。

少しでもいい、立てる程度にまで回復が出来れば……。

たどり着いた右手が柔い癒しの光を生み出す。

ゆっくりとだが体の痛みが消え、意識もはっきりとしてきた。

よし、これだけ動ければ……十分だ！

地面を踏みしめて腰を上げ、もう一度化け物を見据える。まずは吹き飛んだ赤セイバーを確保しないと。

と、チラリと辺りに目をやった、その瞬間だった。

奴の腹がギラリと光って、その光が俺に向かって伸びてきたのだ。

くそっ！　いきなりかよ！　だけど、それほど速い光じゃない。

回避を……！？

その場を離れようと足に力を入れた。しかし、ダメージがかなり残っているのか思うように動いてくれない。
今、攻撃なんか食らったら……死……冗談じゃない！！
咄嗟に両腕を顔の前でクロスする。足を踏ん張ってガードの構えをとり、目をギュッと瞑って光の到達に備える！
刹那、体全体を衝撃が襲う！　……ことはなかった。
ん？　まだあの光はこないのか？
俺はゆっくりと固く瞑った両瞼を開いていった。そこで俺はとんでもない光景を目にしてしまった。
俺の目の前で奴の光から俺を守ってくれているものがあった。細身ながらもしっかりとした体の赤いショートヘアの女。リコだった。レスタが効いたのだろうか、ボロボロだった彼女が今そこに立っていた。
「リコっ！！？」
思わず声をあげる。
その声が届いたのか、リコは光を受けながらも首だけこちらに向けた。
「おい、リコ！　そこから離れろ！　俺はもう大丈夫だから離れるんだ！　それ以上攻撃を受けたらせっかく回復した体がまたボロボロになっちまうぞっ！」

俺の呼びかけにしかし彼女は目を瞑った。

「ありがとう。でも……ごめん、ダメみたい」

苦笑いを浮かべる彼女。

「何言ってるんだよ！　ダメとか言うな！　お前はレッドリング・リコだろ？」

リコの腕を取ろうと手を伸ばす。しかし、狙いを定めたはずの俺の右手は空をかいた。

リコが宙に浮いて、奴の光によって引き上げられていってしまったのだ。

届かない俺の右手が無駄だと分かっていても少しでも距離を縮めようと足掻いていた。

「リコ！　リコーーーーーっ！！！」

必死に叫ぶ俺の声を背中に受けた彼女の目元が一瞬光ったように見えた。

そして、俺の耳に微かにリコの言葉が届いた。

「アキは……生きて……」

直後、リコは化け物の体内に取り込まれていってしまった。

「リコーーーーーーーーっっ！！！」

辺りに俺の叫び声が響き渡る。

その声が風にかき消えた瞬間、妙に周りが静かだった。

くそっ！　またリコを守れなかった！　二度も同じ過ちを……

しかも、今度は取り返しがつかない……！

俺はその場に崩れ落ちた。膝を地面について、腕で体を支えてうな垂れていた。

世界が落ちていく感じがした。

しばらく俺はそのままの体勢でいた。リコの事で頭の中がいっぱいになり、後悔が幾度も巡り回っていた。

そんな時だった。

にわかに辺りが騒がしくなった。地響きと空気のゆれが俺の体も揺らしていた。

顔を上げる俺の目に飛び込んできたのは、リコを取り込んだ化け物が光だし、その形状が変化していっているところだった。

こいつ、まだ何かしようってのか……リコを殺しておいても尚っ！

俺はその場に立ち上がった。そして、奴をにらみ付ける。

「お前だけは絶対にぶっ倒すっ！！」

右手で端末を操作して左手に力を溜める。光りだした左手を化け物に掲げてその力を放つ。

「フォイエっ！！」

言葉と同時にいくつもの燃え滾る火球が放たれた。直後、全てのフォイエは奴へと着弾した。

しかし、ダメージらしきものは認められない。未だに光り輝くそいつはどんどんとその形状を変えていっている。

くそ、やっぱりテクニックじゃあダメだ。直接攻撃しないと。

俺は辺りに目をやって赤セイバーを探す。

何度か首を動かすと、視界の端に赤く光るものを捉えた。

あった！　よし、後はあれで奴が倒れるまで斬り続けてやる！

と、足を赤セイバーに向けた、その時だった。

なっ！？

急に体に力が入らなくなって、意識がとんでいきそうになった。

なんだ！？　いきなりどうしたんだ！？

困惑する俺を他所にその現象はどんどん強くなっていった。

そして、この現象がある事と似ている事に気付いた。

転送時の……感覚……？　なんでこんなところで……。

それが分かった時、俺の意識は強制的に切られたようにとばされた。

奴を……リコの仇を……。

「……い……おい。死んでやいないだろ。目を覚ましたまえ」

耳に届く声。男の声である事と、妙に効き覚えがある声だと感じた。そして、自分の意識が戻っていることも。

俺はゆっくりと目を開けた。

「やぁ、お疲れ様。どうだったかい？　時空を越えた感想は？」

目に入ってきたのはまだ若い白衣姿の男。忘れもしない、俺を過去のラグオルにとばした張本人、オービックだ。ということは……！

俺は勢い良く上体を起こした。

「おい！　ここはどこだ！？」

食って掛かる勢いでオービックに声を当てる。

「おいおい、忘れてしまったのかい？　ここは僕の研究所だよ」

そう言われて辺りを見渡す。

確かにここはオービックの依頼を受けて通された部屋だった。過去に飛ばされる前とまったく変わった様子が無い。

今いるところがオービックの研究所で、奴が目の前にいるということは……ここは元いた時間の世界なのか？

俺はそこでハッと気付いた。

「おい！　オービック！　今すぐ俺をさっきまでいた場所に戻せ！」

寝かされていたソファーから飛び起きて、オービックに迫る。

「な、何を言っているんだ？　今更戻って何をしようっていうんだい？」

俺の形相があまりにもすごかったのか、オービックは一歩たじろいでいたが、口調は相変わらずの物だった。

だが俺はそんな事は気にも留めずに更に迫る。

「何って決まってるだろ！　あの化け物をぶっ倒しにいくんだよ！！」

そう言い放った俺にオービックは返す言葉はなかった。が、その

表情が気負っているものから、冷めたものへと変わっていったのが見て取れた。

「なんだよ！？　何か言いたいのか？」

怒鳴る俺にオービックは口を開かず窓辺に向かって歩いていった。そして、窓にたどり着いた時、奴は背を俺に向けたまま口を開いた。

「……倒す？　君が倒すといっているのは、あの素晴らしい生命体の事かい？」

静かに流れたオービックの言葉は確かにそう聞こえた。

「どういうことだ？　素晴らしい生命体とかいうのはあの化け物のことかよ？」

「ふぅ、どうやら君にはあの生命体がどれほど素晴らしいものか分からなかったようだね。やはりすぐにここに呼び戻してよかったよ」

「呼び戻す……？　じゃああの時転送される感じになって気を失ったのはお前のせいなのか？」

俺は今までの荒立てた声ではなくて、静かな口調で慎重に訊ねた。こいつ、返答によっちゃあタダじゃあおかない……！

「そうさ。僕以外に君を現代の時間に戻せる人間がどこにいる？」

「なら、どうしてあのタイミングで戻したんだ？！　まさか偶然じゃあないんだろ？」

「ああ、もちろん。君の事は過去のラグオルの森へとばしたところから遺跡の最深部までずっと、一緒に過去へととばした小型追尾機で常時チェックさせてもらっていたよ。君は僕の指一つでいつでも今の時へと戻すことが出来たよ」

オービックはそういうとこちらを向いてデスクの上に置いてあったノートパソコンらしき物をポンポンと叩いた。多分そのノートパソコンで過去の俺の行動を監視していたんだろう。しかしそれなら、尚更俺はこいつに問いたださなければならない！

「じゃあどうしてあの時に俺を戻したんだ？　俺の身に危険が迫っていたから、なんていう返答じゃあ納得しないからな」

俺はオービックを睨むようにそう言った。

もし、危険性があったと判断して俺を戻したのならドラゴンやデ・ロル・レとの戦闘の時に戻されていたはずだ。

「ふ、当たり前じゃあないか。僕は君の雇い主だよ？　君の命がどうなろうと知ったこっちゃ無い。僕が守りたかったのは逆。あの生命体を愚かな君から守るために君を現代に戻したのさ」

鼻で笑うオービック。

俺はその言葉に言葉が詰まった。

こいつ、何言ってるんだ？　あの化け物を守る、だと……？

俺の困惑を他所にオービックは話を続けた。

「いいかい？　あの生命体はねダークファルスと言って闇の意識体なんだ。その存在をオスト博士は発見した。博士の調査と研究によると、このダークファルスは実体を、つまり肉体を持っていない。そのために肉体を求めているんだ。より、優秀な肉体をね」

ダークファルス？　意識体？　どういうことだ？

いまいち話が掴めない俺は更に困惑させられた。

オービックの話はまだ続く。

「その話を僕は以前からオスト博士に聞いていた。オスト博士に一番近しい僕だから聞くことの出来た話だけどねぇ。そして僕はその話を聞いて、実際に試してみたくなったのさ。ダークファルスに優秀な肉体を与えるとどうなるか、ってね」

そう言ったオービックは口の端をニッと吊り上げて、気味の悪い笑みを浮かべた。

俺はその言葉に背中から汗が吹き出た。

つまり……それは……。

「そこで僕は考えた。優秀な肉体とはどんなものなのかをね。それで思いついたのが、彼の有名なハンターズにして明晰な頭脳を有するレッドリング・リコさ。まぁ、頭脳に関しては僕には到底及ばないけどねぇ。ただ彼女を使うには問題があった。今もって彼女は行方不明、政府の奴等も彼女等の発見に手をこまねいている状態なのに使えるはずがない。だったら行方不明になる前に使えばいいだろ？　僕には時空転送装置がある。それで確実に所在の分かる過去へ

とんでリコを遺跡まで連れて行けばいい」

俺はオービックの言葉が耳に入れば入るほど頭の中が真っ白になっていった。

……俺が……リコを……。

「その時のリコの護衛兼誘導役としてハンターズの奴等を使おうとしたら、君がやってきたというわけさ」

俺が、リコを……あんな目に遭わしちまったって事なのか……？

「さ、君の仕事は終わったよ。金を取りにさっさとギルドに行きたまえ」

オービックは手首を幾度か返して、俺を追い払うような仕草を見せる。

しかし、俺は自分の犯してしまったとてつもない事に対する後悔と怒りとをどこにぶつける事も出来ずにいて、その矛先をオービックに向けた。

「おいっ！　この仕事の内容がリコをあんな目に遭わせることだなんて聞いてなかったぞっ！！」

奴の胸座を掴んで怒声を浴びせる。しかし、オービックはそれにおじける様子を見せず、しごく冷静な視線を俺に向けた。

「言わなかったんじゃない。言う前に君が出て行こうとしたから言

えずに過去へとばしたんだ。それに君は僕の依頼を遂行しようとはせずにリコを遺跡へと導いて行ったじゃないか！　それで僕を責めるのは筋違いと言うもんだろ？」

その言葉に俺は頭を強く殴られたような感覚に陥った。滲み出て来るリコとの行動の記憶。その記憶が俺の心に打撃を与えていった。

そうだよ……俺は遺跡を目指していたわけじゃない……なのに俺はリコを遺跡まで連れて行ってしまった……あの時森で地下への転送装置に乗らなければ……地下空洞で引き返していれば……地下研究施設でもっと違う脱出方法をとっていれば……。

後悔しか浮かんでこなかった。

自分を責めるしかなかった。

最後までリコに迷惑をかけて、あげく……命まで……。

俺は床に膝を着いて、放心状態となっていた。体に力が入らなかった。

「相当自分のしたことに参っているようだねぇ」

俺の目の前でおもしろいおもちゃを見ているような感じでオービックが口を開いた。

「ついでだからもう一つ教えておいてあげよう。さっきも言ったけど僕は小型の追尾機で君の行動を見ていた。君は遺跡で気を失った間にリコがダークファルスに攻撃されていたと思っているみたいだけど、あれはねぇ、君がやったんだよ！　君がリコをあんな風に

ボロボロに攻撃したんだよ！」

オービックの言葉に俺は顔を上げる。奴の顔はいやらしくニヤついていた。

「……俺が……リコを攻撃した……うそ、だろ？」

「嘘などつくものか。君は遺跡の入り口部分に達したときにダークファルスの意識にのっとられたんだ。それで、最初は君がダークファルスに取り込まれたのさ。その時の戦闘でリコはあれだけ負傷していたんだよ」

そう言われて俺はあの不快な空間で戦った記憶が思い出された。

オービックの言葉が正しければ……遺跡の前で意識がとんだ後に化け物に取り込まれたらしいが、あの時俺はどこかの空間で白い影と戦っていたはず……？

過去にいた時の記憶を必死に手繰り寄せる。俺がリコを攻撃するだなんて馬鹿な事がありえるはずがない！

そうだよ、あの白影には背中に致命傷を与えてやった！　リコにはそんな傷……？！

俺はそこまで思い出して全身の血の気が引いていくのが分かった。

……あった……リコの背中に……傷が……赤い、真っ赤な血が溢れてた……！　たしか、あの背中の傷はまるでセイバーのような武器で斬られていた……。

更に俺の記憶はあの時の事を思い出させるように湧き出してきた。

そうだ……腹を貫かれた時白影ののっぺらした顔がリコの顔になった……！！　そうだよ！　あの時見た顔は確かにリコの顔だった！！　……じゃあやっぱり俺が、リコを攻撃していたのかよ……！？

その考えに至った時、俺の精神はとどめをさされた。

手が震えた。震えが止まらない。自分の体が自分のものじゃあないみたいになる。心が堕ちていく、底の見えない闇の中に沈んでいく。

……すまない……リコ……！！

心の中で謝っている、謝ることしか出来ない自分が余計に許せなかった。

そんな俺にオービックは更に言葉をかけた。

「まぁ、しかしリコがダークファルスを弱らせて君を引きずり出してくれてよかったよ。あくまで僕はリコという優秀な肉体を得たダークファルスが見たかったわけだからねぇ。おかげでちゃんと目的も達成できて、予想以上のデータも採れたよ」

打ちひしがれる俺にオービックの言葉が耳に届く。だけど、もう何を言われようとこれ以上堕ちていけるところまで堕ちた俺の心は……ん！？

俺は今耳に入った言葉にある思いが浮かび上がり、奴の言葉を思

い出してみた。

……そうか……そういうことならっ！！

俺は閃いた。頭の中がパァッと明るくなる。一つの微かな、本当に一滴の水のようなわずかな希望が俺の心を闇の底から救い上げた。

その希望を確かに掴むと、俺はその場にすっくと立った。

「どうしたんだい？　もう落ち込まないのかい？」

へらへらしているオービックに向かって俺は口を開く。

「ああ、落ち込んでなんかいられない。それと、こいつは俺に希望をくれたお前の言葉への礼だ」

そういうと俺は固く握った右拳をオービックの顔面に向かってぶちかました。

「……ここんとこの異変と何か関係があるの？」

目の前に設置されていたメッセージカプセルは記録されていたメッセージを全て流し終えたのかホログラフがカプセルの中に吸い込まれていった。

たぶん森でリコに最初出会った時に、リコが一人でセントラルドームに向かった際に設置したカプセルの一つだろう。

俺は視線をカプセルから上へと向ける。セントラルドームが俺を見下ろしていた。

「……リコ」

思わずポツリと言葉が漏れた。

俺は今ラグオルに降りて、遺跡へと向かっている。

あの時、オービックの研究室で奴が言っていた事で俺は考えた。俺がダークファルスに取り込まれてしまった時にリコが俺を助けてくれたのなら、それと同じようにダークファルスに取り込まれてしまったリコを助けることが出来るんじゃないかという事を。

絶対に助けてやる。そして、謝るんだ、リコに！

俺は改めて決意を固めると手元に目を落とした。そこには修理したての赤セイバーが握られている。

過去に置いてきてしまった赤セイバーだが、やはり森で拾ったあの赤セイバーはリコのものだったらしく、修理から帰ってきた赤セイバーはすぐ手に馴染んだ。

俺は赤セイバーを強く握った。

リコとの繋がりを確かめるように強く、強く。

$\wr$
E
N
D
$\wr$

Chapter ?－b　－END－（後書き）

２００６年　制作
２０１０年　加筆・修正

軽くラノベ１冊分くらいの長さになっておりますが、ここまで読んでいただいた方に深く感謝申し上げます。

ありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3378p/

ＰＳＯ　～The red of destiny～

2011年2月27日15時17分発行